

11	小国407
学图	

教育部
資料室

教科書文庫
6
810
34-1949
0130449663

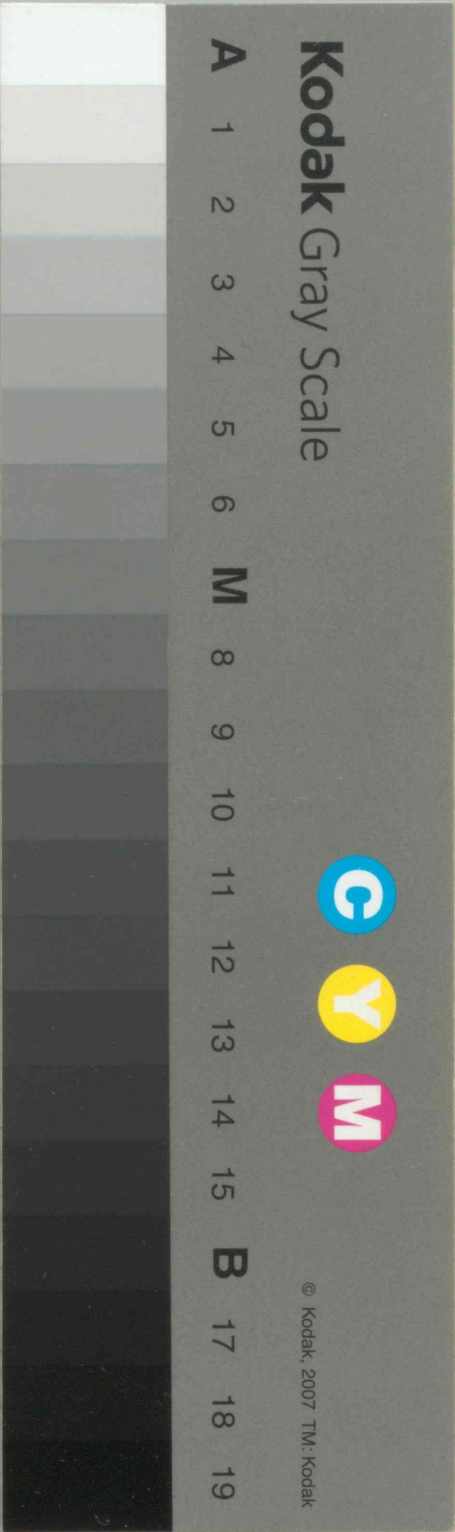
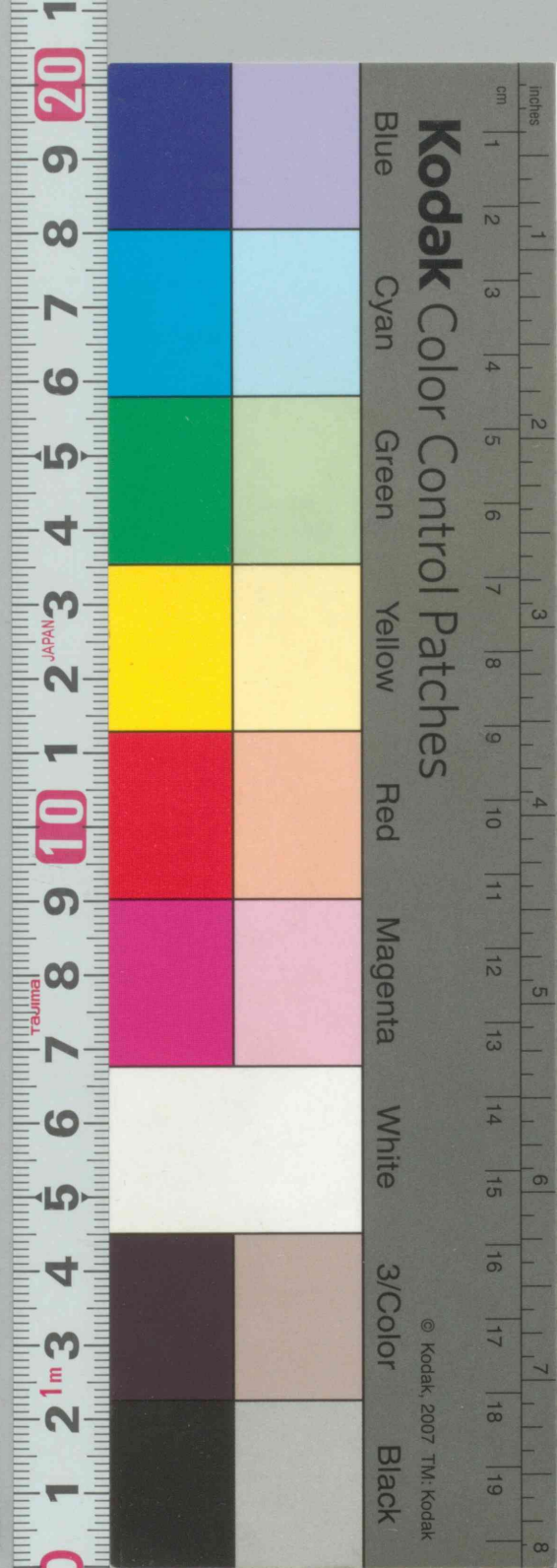
文部省
検定教科書
法財人団
学校図書
研究会編修

国語四年生上



学校図書株式会社発行

小国
916
k



60386
教科書文庫
6
810
34-1949
01304
49663



寄 贈

教科書文庫
6
810
34-1949
0130449663

昭和二十四年十月十日文部省検定済小学校国語科用

国語四年生



上

広島大学図書

0130449663

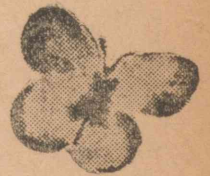
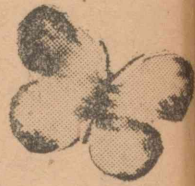
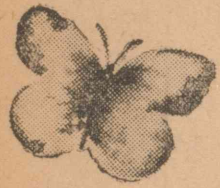
広島大学
教育学部図書

学校図書株式会社

中央図書館

広島大学図書

0130449663



もくろく

(一) 学級新聞

一 新聞を作ろう.....4

二 新聞ができた.....12

三 ひひょう会.....32

(二) いろいろな国の話

一 かしこい旅人.....36

二 いたずらうさぎ.....42

三 トム・サム物語.....50

(三) 海の生活

一 水泳.....58

二 かつじくんの町.....63

三 ロビンソン・クルーソー.....74

(四) きれいな空

一 秋はどこに.....88

二 星の世界.....93

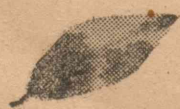
三 こまと星.....98

(五) 森の子ばと

お仕事の手びき.....143

新しくできたことは.....154

かん字.....159



(一) 学級新聞

一 新聞を作ろう

(一) 話し合い

まさおくんの学級では、四年生になってはじめての学級会をひらきました。先生もおいでになりました。

話し合いをまとめるかかりには、たかしくんがえられました。学年が一つすすんだだけあって、たかさんの意見ができました。そのうち、てんじばんのことも、もんだいになりました。いさむ「作文やえを、てんじばんにはるのもおもしろいが、みんなの

考えを発表するのに、もっとかわったくふうはないでしょうか。すみこ「わたくしのに皆さんの学級では、学級新聞を作っているそうですね。このくみでも作ったらどうでしょう。」

みちお「それはいい思いつきだ。さっそく作ってみてはどうです。」

あちらからもこちらからも、「さんせい」の声が出て、学級新聞を作ることに、話し合いがまりました。

たかし「ところで、なん日ごとにだしますか。」

ゆきこ「ひと月に一どしたらどうでしょう。」

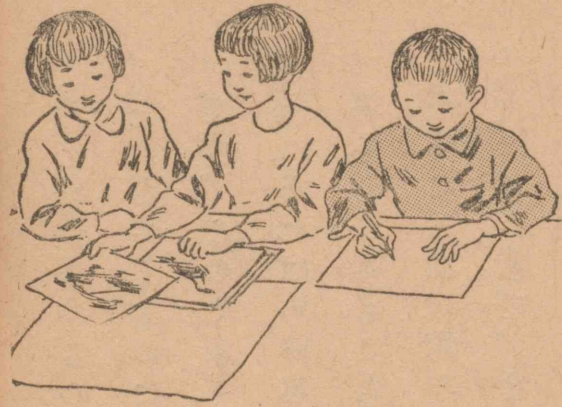
はるお「ひと月に一どではさびしすぎるな。せつかくだすのなら、もっと多くほしい。」

まさお「それでは、十日に一どぐらいにしましょうか。」

かずこ「十日に一どというのもいいですが、学校のお仕事は、いつも一週間をもととしておこなわれています。十日とくぎっても、その十日が、日曜日からはじまることもあるし、土曜日からはじまることもあります。その上、三十日の月はいいですが、三十一日

の月は、はしたの一日をまえにつけるか、あとにつけるかはつきりしません。二月の月などは、二十八日や二十九日があつて、日数が平均しないので、つごうが悪くはないでしょうか。」

「かずこさんだけあつて、かずのことはくわしいね。」と、だれかがいったので、みんな大わらいしました。しかし、かずこさんのこまかい考



え方には、みんな感心しました。

いさむ「月に一どでは少なすぎるし、十日に一どでは、日数のきり方がつごうが悪い。それでは、一週に一どにしたらどうでしょう。」

みんな「さんせい。」「さんせい。」

学級新聞を作るとして、印刷をどうするかがもんだいとなりました。印刷所にたのむという意見もでしたが、費用が高くなって、じつこうされそうにありません。はじめの間は、みんなのげんこうをはり合わせて、一まいの新聞を作ろうということに、話し合いがまとまりました。

まさお「学級新聞は、てんじばんとちがつて、編集がかりがたくさん

いると思います。」

ゆきこ「なんにんぐらいにしたらいいでしょうか。」

みちお「新聞を作っていくとき、どんな仕事があるかを考えると、大かた、かかりの人数もきまっています。」

新聞全体のくみたてを考える人、みんなのげんこうを集めて、せ
いりする人、ニュースをさがして文に書く人、運動の記事を集め
たり書いたりする人、カットやさしえを書く人などと、なかなか
たくさんの仕事があるようです。こう考えると、編集がかりに十
人はいるでしょう。」

かずこ「十人ぐらいにして、たりなかつたらまずことにしましょう。」

編集がかり十人は、みんなからえらぶことにしました。

(二) 編集集

まさおくんたち十人のものは、勉強がすんでから、教室で、学級
新聞の編集のことを相談しました。

まさお「はじめてだすのだから、いいものを作りたいなあ。」

すみこ「わたくしもそう思いますわ。みんなが喜んで読むように、お
もしろい記事をたくさんのせたい。」

はるお「喜んで読むのもいいが、それだけではいけないよ。ぼくは、
みんなのためになることを第一に考えたい。」

ゆきこ「はるおさんやすみこさんのいうことをどちらもとって、おも
しろくって、ためになる新聞にしたらいいわ。」

まさお「それには、みんなさんせいでしようが、どんなものをのせた

らしいか、話し合いましたよ。」

かずこ「詩や作文はどの号にものせたい。おもしろいお話もわすれな
いようにとりたい。」

このとき、新聞にのせることについては、あちらからもこち
らからも、意見がたくさんでてきました。

「長いお話だけでなく、短いわらい話ものせたい。」

「動物をしくしたり、かんさつしたりした日記もほしい。」

「文だけでなく、きれいなえを入れて、美しい新聞にしたい。」

まさお「のせることがらは、大たいきまったようですから、編集の
かきをわけたらどうでしょう。」

と、かかりの相談にすすみ、つぎのようにわけることになりました。

□ 新聞全体のくみたてを考える人……………二人

□ げんこうを集めてせいりする人……………二人

□ 学級ニュースを集めて書く人……………二人

□ カットやさしえを書く人……………二人

□ 運動記事を書く人……………二人

くじびきで、かかりの人がきまりました。「げんこう集め」の文を、
つぎのように、教室にはりだすことにしました。

一、詩、作文、お話、わらい話、しく日記、かんさつ日記など、
どれか一ぺんをだしてください。

二、みんなのためになるもの、おもしろいものを書いてください。

三、さしえもくふうして、入れてください。

二 新聞ができた

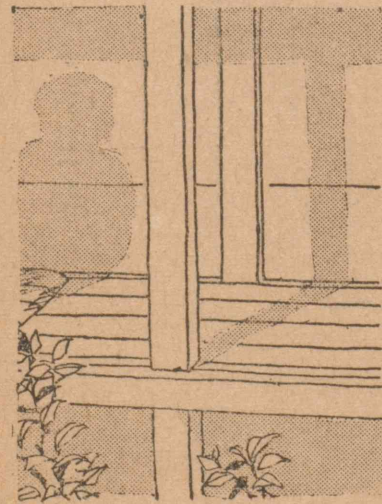
学級新聞第一号ができた。教室のうしろのかべには、
れ、学級のものみんな大喜びで見えています。詩、作文、お話、
しいく日記など、おもしろい記事、ためになる作品が、たくさんの
せてあります。カットやさしきは、新聞を美しくし、また、おもし
るみをそえています。

(一) 詩

◇ あたたかい日

あたたかいえんがわ。

ぼかぼかした日が、



わたくしをふくりますようにてる。

ざぶとんの綿が、

ふわりと、

とびそうにかるい。

ふくらんだざぶとんにのったら、

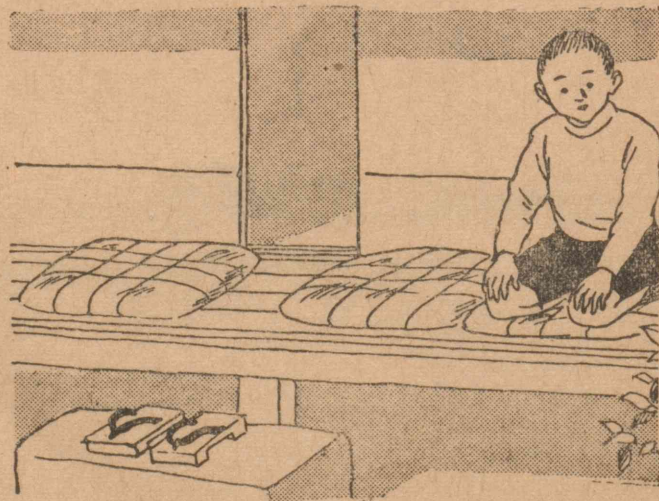
かるくおどっているようだった。

◇ 川は流れている

川は流れている。

あるときは

くちなしを流したように、黄色に。



あるときは

はにかんだ少年のように、ばら色に。

川は流れている。

川しもの方からふいて来る風がある。

水のおもてをさかなでしたり、

どんぼがえりさせたりしているときがある。

いちめん、ちくおんきのはりをこぼすように、

雨がプスプスつきささっているときがある。

そんなときも川は流れている。

水と空気が一つにすんでいる。

おだやかな日にしてもおなじだ。

流れがとまっていなことをためすには、

一まいの木の葉を投げさえすればいい。

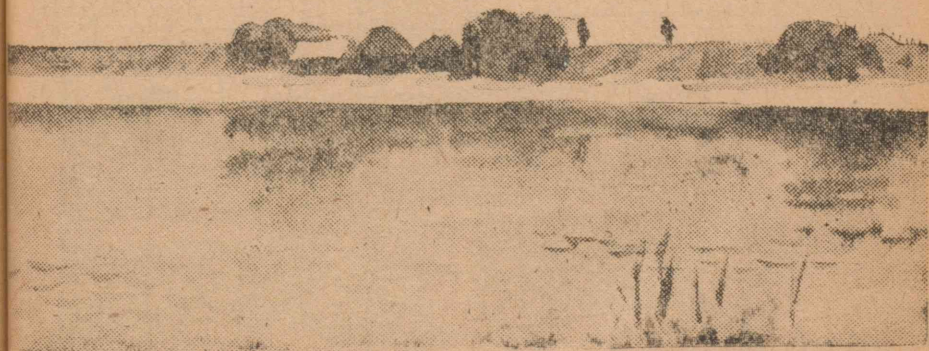
川は流れている。

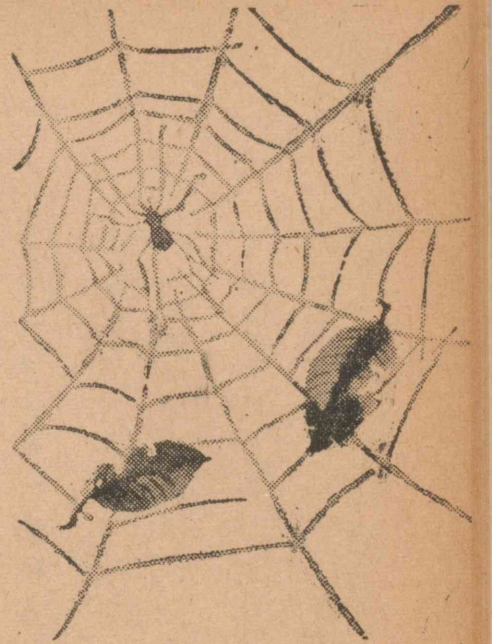
まえへまえへと流れている。

☒ ハンモック

くもがつくった

ハンモック。

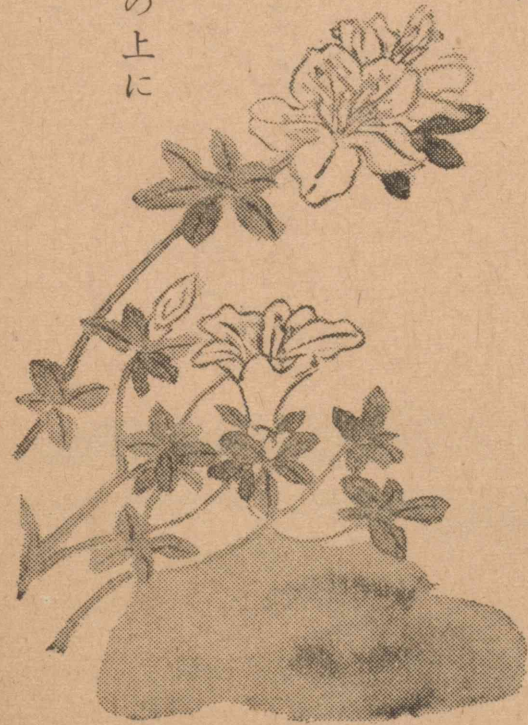




◇ 雨あがり

お庭の水たまりに
つつじがうつっている。
わたくしがのぞいたら、
わたくしの顔がつつじの上に
ぼっかりうかんだ。

木の葉が二つ
ねています。
風にゆられて
ねています。



(二) 作文

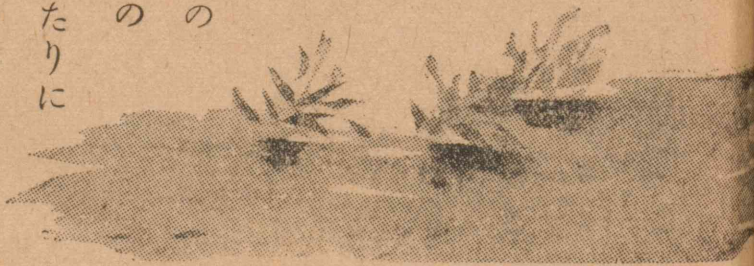
◇ めだか

「すい、すい、すい。」

めだかのむれが、みがるそうに泳いでいる。泳ぐ
たびに、平らな水のおもてに、小さな波がただよう。
あとからあとから、あたらしいむれが来る。

「しっ。」といって追うと、急にむきをかえて、川ばたの
ふさのような形をした、うき草の中ににげこむ。ぼうの
さきでつついてやると、おどろいたように、ぱっとあたりに
ちって、しっぽを動かしながら、なかまの来るのを待っている。

こちらでは、なかまにはずれたためだかが一びき、岩かけをうるつ



いている。しらうおのようにすきとおって見える。まもなく、むれがやって来た。いまの一びきもその中へまじって、むこうのうき草の中へきえていった。

うき草にめだかあそぶや春の水

◇ はいかぐら

「しまった。」と思って、うしろを見たときは、もうおそかった。

火ばちの中からは、もうもうと火山のように、はいが立っていた。やかんが火ばちの中へ、ひっくりかえたのである。ぼくはびっくりして、いままで手に持っていたほうきをそこへ投げだして、ひきおこそうとしたが、あつくてあつくて、手のつけようがない。そこへおかあさんがおいでになって、「どうしたの。」と、おききになった。

「ほうきがあたって、やかんがひっくりかえったんです。」と、こたえた。

「まあ、けががなくてよかったわ。これから気をつけなさいよ。」

おかあさんはこういって、やかんをもとのようにしてくださった。ぼくは、ほっと安心した。

◇ 一合二本

「一合、二本。」一合、二本。……………」

妹はうつむいて、小声でこういういいながら歩いている。ぼくは、うしろから声をかけた。

「ひろちゃん、どうしてそんなことをいって歩くの。」

「だまって、だまって。」

と、妹はおこったようにいって、やおやの方へ足を急がせた。ぼくは、なんのことだかちっともわからない。

うちに帰って勉強していると、

「ただいま」という声がした。げんかんにでてみると、やっぱりひろこであった。ひろこは台所へいって、おかあさんとなにやら話している。

あとで、おかあさんにたずねたら、

「すを一合に、ごぼう二本を買いにやったので、たぶんそれをいっていたのでしよう。」

と、わらいながらおっしゃった。ぼくは、さっきの「一合、二本」のいみがやっとわかった。

(三) わらい話

□

父 「きょうは、なん日だったかね。」

子ども 「さあ——、なん日でしたかしら。」

父 「そこに新聞があるが、日づけを見てごらん。」

子ども 「だめですよ。これは、きのうの新聞ですから。」

□

「世界一のことをくふうした。」

「なんだ。」

「雨がふってもぬれないくふうがある。」

「どうして。」

「雨と雨との間を通りぬけていくのだよ。
「なるほど。」

□

あわてものの花子さんが、おじいさんの所へ、とんでいきました。

花子「おじいさん、おじいさん。」

おじいさん「あわてないで、ゆっくりお話しなさい。」

花子「おーじーいーさーん。ねーこーがーさーかーなー！」。

おじいさん「えっ。」



(四) 自分で育てたもんしろちょう

五月九日 つつじの花が、いまをさかりとさいている。みちおくんやいさむくんたちをよんで来て、庭の草花あつめをした。名の知れない、いろいろな花がさいていた。いさむくんが、いぬがらしの葉のうらに、なにか小さなたまごのくつついているのを見つけた。長さは一ミリぐらいのだえん形で、うすみどり色をしている。はなればなれに、三つうみつけてある。三人ともわからない。にいさんの所へ持っていったら、

「これは、もんしろちょうのたまごかも知れない。かってみようじやないか。」

と、おっしやった。もんしろちょうは、だいこんやあぶらなにはか

り、たまごをうむものと思っていたのに、こんなざつそうにも、うむものであることを、はじめて知った。ちょうどいいガラスぶたのはこがあったので、それに入れて一日中、えんがわにだしておいた。五月十日 きょう、うすみどり色をしていたたまごが、きょうは全部黄色になっていた。

五月十五日 夕方見ると、いつのまにか小さなけごが、三びき生まれていた。かいこのけごのように、黒くはない。黄色で二ミリぐらいの大きさである。たまごのからは、いくらさがしても、見つからない。どこへいったのだらう。

だいこんのやわらかい葉を一まいとって来て、その上にのせてやった。しばらくして見ると、けごの色は青くなったように思われた。

五月十七日 だいこんの葉をとりかえてから、長さをはかってみると、やく三ミリぐらいになっていた。

五月二十日 青虫は、たまごからかえると、まもなく自分のぬけがらをたべるものだということを、先生から教えてもらった。この間、ふしぎに思っていたことが、ようやくわかった。きょうの青虫の大きさは、六ミリである。

五月二十四日 この二三日は、大きくなるのが目立って来たようである。はかってみると、やく二センチになっている。

五月二十五日 きょうは、青虫の形を調べてみた。一びきの青虫には、ふしが十二ある。それらのふしには、たくさん黒い小さな点があつて、そこから短い色の毛がはえている。頭は小さく、むね

には三ついのあし、はらには四ついのあし、おしりに近い方には一ついのあしがあつて、それぞれの形のちがつていることは、かいことおなじである。

五月二十八日 青虫は、からだの長さが二十八ミリにもなつて、よくたべるようになった。青虫も、かいことおなじように、皮をぬいで大きくなるらしい。そのぬけがらしいものを見つけた。にいさんに話したら、

「このまえ、にいさんがかつたときには、かいことおなじく四回皮をぬいで、それからまもなく、さなぎになったよ。」

とおっしゃつた。もっと早くから、注意しておけばよかつた。

五月三十日 体の長さは三十四ミリにもなつて、ほとんど葉をた

べなくなつた。にいさんが、

「こんやあたりさなぎになるかも知れない。」

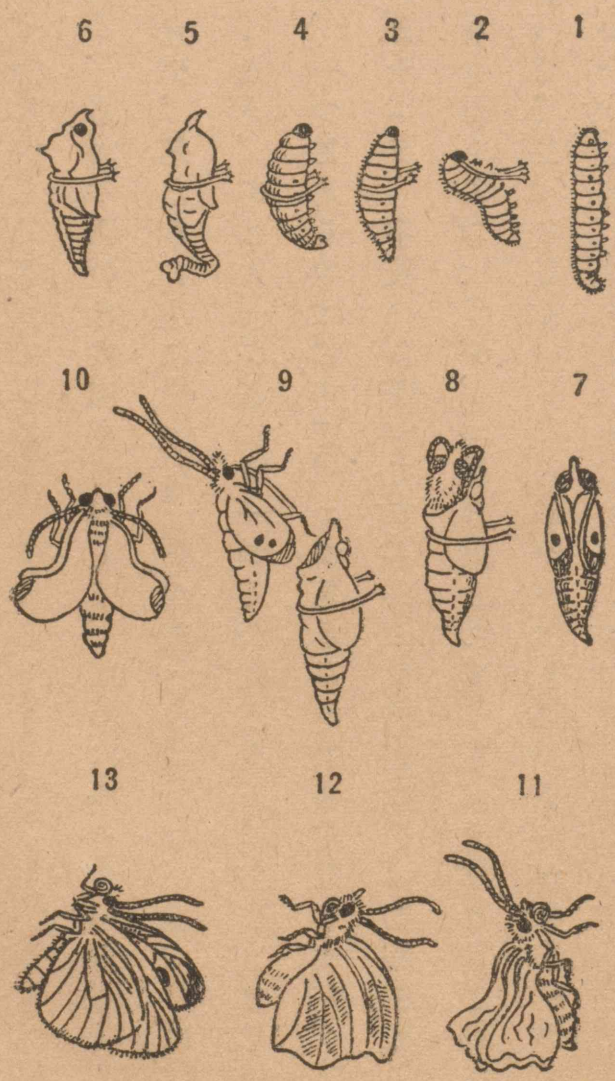
とおっしゃつたので、はこの中に木の小えだを二三本入れてやつた。

六月一日 朝起きてみると、まださなぎにはなつていない。しかし、からだは大へん太く短くなり、つやもなくなつてゐる。そうして、しきりに口から糸をだして、頭を右へまげたり、左へまげたりしてゐた。

学校から帰つてみると、朝よりもつと太く短くなり、こんどは、からだのまん中より少し上の所を、白いおびでささえている。どうして、あのおびを、からだのまわりにまわすことができたのか、見たかつた。

六月二日 きょうは日曜日だったので、思わず朝ねぼうをした。ごはんをすませて、九時ごろ見にくと、もうすっかりさなぎになっていた。しかし、たったいま、さなぎになったらしく、色はみんなつやつやしていた。長さは、やくニセンチで、黄色のじに黒い点がちらばっている。頭のさきはつのようにどがつており、せなかの方も角ばっている。見ると、中の一ぴきには、おしりの所にぬけがらのようなものが、くつついてある。はこの中を調べてみると、ほかの二ひきのは、下に落ちていた。これで青虫がさなぎになるとき、五回目の皮をぬぐものであることがわかった。

六月六日 さいしょ、みどりがかつた黄色のさなぎが、きょうはねずみ色にかわっていた。



六月十一日 さなぎの形が少しかわって来たようなので、明か
い所へ持ちだして調べてみると、中にはもう、ちょうができてい
らしく、むねの両がわの皮をとおして、はねについているもようの
黒い点が、見えるようになった。その黒い点は、二ひきの方には二
つずつ見え、あとの一ひきには一つしか見えない。おとうさんの話
では、一つ見えるのはおすで、二つ見えるのはめすだそうだ。

六月十二日 学校から帰ってすぐはこの中をのぞいて見ると、き
れいなもんしろちょうが、二ひき生まれていた。両方とも身動きも
しないで、じっとしている。あとの一ひきは、まださなぎの形をし
ているが、しきりにからだを左右にふっている。わたくしは、息を
こらして見ていた。すると、むねの上がわのまん中が、たてにわれ

たかと思うと、そこからちょうの頭がでてきた。それからわずか一
分ぐらいの間に、全身を外にだしてしまふ。でてきたときは、はね
は小さくてあつく、おまけにゆがんでねじれ、がのはねのように
たれている。かたわのちょうかしらと思つて、よく見てみると、ま
た一分間ぐらいたつうちに、そのはねは外の方へなみうちながら、
二ばい三ばいと大きさをましていき、二三分の後には、全部しわの
のびた、美しいもんしろちょうとなった。こんなきれいなちょうが
たったいままで、このさなぎの中に、はいつていたのかと思うと、ふ
しぎでたまらない。

一時間ほどして、また見にいくと、三びきとも、とびたちたいよ
うに、はねを動かしていた。

三 ひひょう会

まさお 「わたくしたち十人のものが、はじめて学級新聞を編集しました。あるかぎりのちえをだしたのですが、たりないところが、たくさんあると思います。みなさん、気をついたことを、えんりよなくいってください。それによって、第二号は、もっといいものになりますから。」

みちお 「ぼくは、さしえやカットがじょうずにできていたのには、感心しました。大きな絵、小さな絵、まんがしきのおどけた絵、いろいろくふうされていて、絵を見ただけでも、読んでみたい心持がおこりました。」

いさむ 「新聞は一週間に一どしかでないのに、学級ニュースの方は、毎日かわるようになってあったのは、よくくふうされたものだと思います。そのニュースも、ラジオのニュースとちがって、学級としてぜひききたいようなものを、集めてあったのには感心しました。」

すみこ 「学級ニュース集めには、ほねがおれました。これから後、みなさんが、『これはいい』と思われるニュースを、編集がかりに教えてくだされば、もっとおもしろいニュースになりますよう。」

ゆきこ 「詩の中で、わたくしは、『川は流れている』が一ばんすきです。川しもから風のふいて来るところ、雨のふるところなど、見えるようにうたわれています。」

かずこ「短い詩ですが、わたくしは、『ハンモック』が好きです。『木の葉が二つねています。風にゆられてねています。』のところは、よく見る景色ですが、じょうずにうたわれています。」

たかし「めだかの作文もうまいね。うき草の中ににげこむところ、なかまにはずれた一びきのめだかのようにすなどは、ほんとにきれいに書かれています。」

すみこ「一合二本——のだいのつけ方もかわっていますね。なんだろうと、思わずひきつけられて読みました。ふしぎ、ふしぎと考えさせておいて、おしまいに、『ははあ、なるほど。』と、わかるようにうまく書いてあります。」

みちお「はいかぐら——もおもしろい、ぼくもよくやるしくじりを
じょうずにとらえている。」

はるお「もんしろちょうのしく日記は、よくできていると思います。毎日毎日、しくした人でなければ、あんなにこまかなかんさつはできませんね。」

第二号については、つぎのような意見がたくさんでました。

- 一、おもしろい童話をだしてほしい。
- 二、つづきまんがをだしてもらいたい。
- 三、なぞや考えものもだしてもらいたい。

まさおくんたちは、みんなのひひょうをさんこうとして、第二号の編集にかかりました。いっそうりっぱな新聞ができることでしょう。



(二) いろいろな国の話

一 かしこい旅人——(アラビヤ)——

ある商人が、さばくのまん中でらくだを連れたなかまに、わかれてしまいました。商人

は、ひろびろとしたさばくを一日中さがしまわりましたが、どうしても見つかりません。やがて、日も西にしずむというころになって、やっと一人の旅人にであいました。

「きみ、らくだを連れた旅人を見かけませんでしたか。」

商人はさっそくたずねてみました。すると、旅人は、

「そのかたはふとっついていて、びっこをひいておられたでしょうか。」

と、いいました。

「ほんとにその通りです。どこでおあいになりましたか。」

「まあ、待ってください。そのかたは、つえをついておられましたね。それから、らくだはかた目で、左の目が見えませんか。そうして、つんでいる荷物は、はちみつと麦でしょう。」

商人は、たいへん喜んでいいました。

「それにちがいありません。どこへいきましたか。なん時ごろ。」

「じつは、わたくしは、その人やらくだにあわなかったのです。」

「なんですって。あなたはいま、なかまやらくだのことをおっしゃったではありませんか。」

商人は、はらをたてていいました。

「そうです。たしかにいいました。そうしてまた、あわなかつたこともたしかです。けれども、わたくしにはよくわかります。なかまのかたは、あのやしの下で、しばらく休んでおられました。それから、西の方へいかれましたが、それは三時間ぐらい前のことでしょう。」

旅人はおちついていいました。すると、商人はつめよっていいました。

「なにも見ないで、いったいどうしてそんなによくわかるかね。」

旅人は、商人の手をとって歩きました。すぐ立ちどまって、すなの上を指さしていいました。

「ごらんなさい。これが、人の足あと。それが、らくだの足あと。」

あれが、つえのあとです。それから、この人の足あとは、左足の方が右足よりも、深くて大きいでしょう。これで、なかまの人がびっこだといふことは、すぐわかりますね。」

旅人はまた、ことばをつづけていいました。

「つぎに、この足あとを、わたくしの足あととくらべてごらんなさい。わたくしのよりも、だいぶん深いでしょう。ふとった人の足あとが深くつくのは、あたりまえのことです。」

商人はおどろいていいました。



「なるほど。しかし、どうしてらくだがかた目だということがわかりますか。」

すると、旅人はわらいながらいいました。

「あれをごらんさい。らくだが、草をくいちぎったあとがつづいていきますね。よく見ると、それは、らくだの足あとの右がわばかりです。あれを見ると、左の目が見えないということが、すぐわかりますよ。」

商人は、ますますおどろいてたずねました。

「それでは、荷物が麦とはちみつだということは。」

旅人はすなの上をいそがしそうにいききしている、ありの行列を指さしていいました。

「らくだの足あとの左がわのあちこちに、ありがむらがついています。あれは、こぼれたはちみつをすっているのです。また、右がわをごらんさい。麦が少し散らばっているでしょう。」

「では、どうして三時間ばかり前に、ここをでていったということがわかりますか。」

「それは、ひかげですよ。暑いさばくのまん中で人が休むのは、ひかげのある場所にきまっています。ここに休んだあとがあります。これはその時間に、ひかげになっていたところ。いま、ひかげはこちらにきています。そこからここまでひかげがうつるのに、なん時間かかるかすぐわかるでしょう。」

商人はすっかり感心してしまいました。

二 いたずらうさぎ — (アメリカ) —

海は明るく晴れていました。山からおりて来たうさぎは、白いす
なの上で、楽しそうにはねていました。

「いい天気だ。あたたかいなあ。」

こういいながら、うさぎは少しくたびれたので、すなの上にひっく
りかえって、青い大空をながめていました。ふと、やぶのむこうで
声がしました。だれかと思ってみると、くじらとぞうが、海とおか
とでお話をしていました。

「なあ、ぞうくん、きみはおかの上では、一ばん大きな動物だし、
ぼくは海のなかまの王様だ。ふたりが手をにぎりあって、なかよ

くしたら、世界中の動物を手下にするこ
とができるよ。」

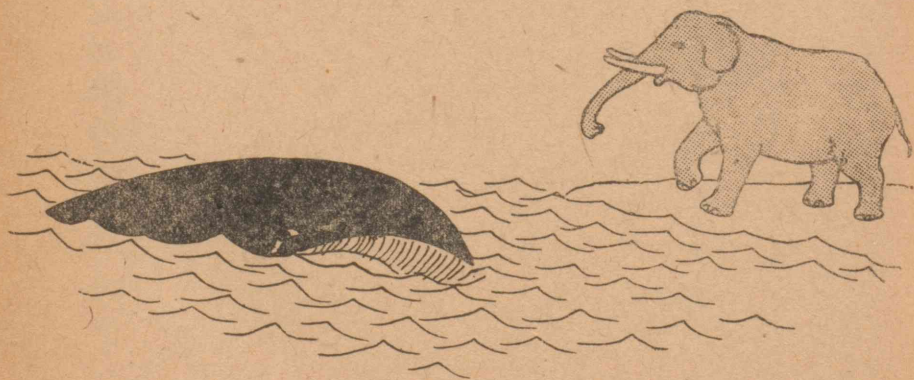
「そうだとも、ぼくもそう思うよ。さっそく
そうしようではないか。」

うさぎは、この話をきいて、ふふんとわら
いました。

「おれは手下にならないぞ。ひとつ、いたずら
をしてやるうか。」

といって、どこかへかけだしていきました。

うさぎはどこからか、一本の長いじょうぶ
なつなをさがしてきました。それから、自分



のうちから大きなたいこを持ちだしてきて、海べの草の中に、かくしておきました。そうして、くじらの所へ行って、

「くじらさん、くじらさん、助けてやってください。なかまのうしが、田の中にはまっています。わたくしたちの力では、あげるこどができません。くじらさんの力をかしてください。」

と、たのみました。くじらは、

「うん、よし、よし。」と、すぐに承知しました。うさぎは、

「では、このつなのはしを、あなたのからだにゆわえつけますよ。それからもうひとつのはしを、うしのからだにくくって来ます。用意ができたなら、合図のたいこをならしますから、ぐんぐんひっぱってください。」

と、いいました。くじらは、

「なあに、山でも森でもひっぱりあげてみせるから。」と、じまんそうにいいました。

うさぎは、ぞうの所へいきました。

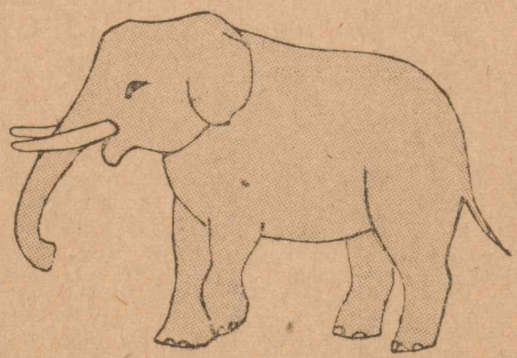
「ぞう様、ぞう様、なかまのうしが、田の中にはまっています。あなたの力でひきあげてください。」

と、たのみますと、ぞうも、じまんそうに、

「よし、よし、どんなに重くてもひきあげてやるぞ。」

と、いいました。うさぎは、

「では、この長いつなのさきを、あなたのからだにゆわえつけます



よ。もうひとつのはしは、うしのからだにくっつけておきますから、合図のたいこがなったら、つなをおひきください。うしのからだは重いですよ。」

と、また、いいました。
「心配するな。うしの十ぴきや二十ぴきは、一どにひきあげてみせるから。」

ぞうはこういって、長いはなのさきをいからせて、ふんとわらいました。

うさぎは、こうしてつなの一方のはしを、くじらのからだにゆわえつけ、もう一方のはしを、ぞうのからだにかけました。そうして、合図のたいこをどんどん打ちはじめました。

くじらも、ぞうも、負けずにつなをひっぱりました。

「どうも、うしのやつ、おそろしく重いぞ。」

こういって、ぞうは前足をうんとふんばって、ありったけの力で、ひっぱりました。

「やれやれ、ひどく重いうしだな、山をひきぬくようだ。うんとこしょ。うんとこしょ。うんとこしょ。うんとこしょ。」

こういって、くじらも、いっしょうけんめいにひっぱりました。けれどもくじらは水の上をういていますので、おかの方へ、だんだんひきよせられていきます。くじらは、これはいけないと思って、いきなり、ざぶんと大きな頭を水の中に入れて、まっさかさまに、海の底深くしずみました。そのいきおいに、さすがのぞうも、海へま



でひきよせられました。さあこうなると、ぞうのおこりかたは大へんなものです。水ぎわでうんとふみこたえて、ひっぱりました。そのいきおいで、大きなくじらの顔が、ひよいと水の上にうきあがりしました。

「おれをひっぱるのはだれた。」

くじらは、はなのあなから高くしお水をふきあげて、どなりました。

「おれをひっぱるのはだれた。」

ぞうもはなをえんとつのように高くあおむけて、さけびました。



「うしのまねをして、おれをだましたな。おぼえておれ。」

と、くじらがいうと、

「ひとをばかにしたな。しかえしはするぞ。」

と、ぞうもいいます。

すると、両方の力で、つながまん中から二つにきれました。くじらは、水の中にひっくりかえりました。ぞうは、ひどくしりもちをついて、地面にあなをあけました。

うさぎは、やぶの中ではねながら、

「あっはっはっは、あっはっは。………」

と、おなかをかかえて、わらいました。

三 トム・サム物語 ―イギリス―

むかし、アーサー大王という王様が、イギリスをおさめていたころのことでした。

マーリンといって、そのころの学者で、名高いまほうつかいのおじいさんが、国の中をあちらこちらと旅をしまわっていました。ある日、マーリンは歩いていっているうちに、大へんくたびれたので、一けんの家にはいって、しばらく休ませてくださいとたのみました。その家の人は、いい人でしたから、すぐマーリンを家の中にいれて休ませました。

ところが、その家の人はふしぎなことに、ふたりともなにか心配



そうな顔をしています。マーリンは、なにかわけがあるのだらうと思ってたずねました。すると、その家のおかみさんが、「わたしたちには子どもがないのです。ほんとうにたったひとりでもいいから、男の子がほしいと思います。なんなら、この人の親指ぐらいな小さい子どもでもいいから。」といって、主人の親指をじっと見ました。この親指ぐらいな小さい子どもという思いつきが、マーリンには大へんおもしろかったので、子どもを生ませてやろうと思いました。

それからまもなく、おかみさんはまほうの力で、男の子をうみました。ほんとうに主人の親指ぐらいしかない、小さな子どもでした。それでも、ふたりは大へん喜びました。

そうして、その子にトム・サムという名前をつけました。これは「親指トム」という意味でした。

ところが、トム・サムはいつまでたっても、おとうさんの親指だけの大きさをした。

そのくせ、なかなかちえがあつて、いたずらばかりしていました。ある日のことです。

トムのおかあさんは、バターとパン粉をまぜて、ケーキを作っていました。

トムはどんなことをするのだろうと思つて、ちやわんのふちにあがつて中をのぞきこみました。

すると、つい足をすべらせて、どろどろしたバターの中へ落ちてしまいました。

おかあさんは、そんなことは知らないものですから、トムをバターでつつんだまま、なべに入れて火の上にかけました。

トムは、口の中いっぱいバターをおしこまれて、声もだすことができません。

そのうちに、こげつくようにおしりがあつくなつてきたので、トムは手足をばたばた動かして、なべの中をあばれまわりました。

おかあさんは、ケーキがへんなふうに動くのを見て、これはまほ

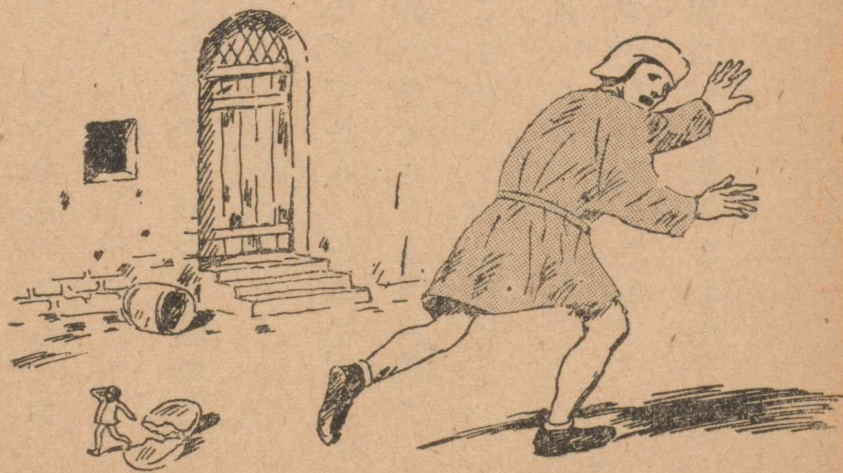
うをかけられたにちがいないと思って、通りがかったいかけやさんに、やってしまいました。

いかけやさんは、ケーキをふくろの中に入れて歩いていきました。

ふくろの中のトムは、口いっぱいはいっているバターをやっとはきだすと、大きな声でワアワアなきだしました。

いかけやさんは、びっくりしてケーキをすててにげていきました。

地面に落ちたとき、ケーキがわれたので、



トムはなきながらはいだしました。そして命からがら、やっと家に帰りました。

しばらくたってからのことです。ある日、おかあさんはトムを連れて、うしのちちをしぼりにいきました。

風のある日でしたから、おかあさんはトムがふきとばされないように、トムのからだを、糸で草にゆわえておきました。

すると、うしはトムの青い木の葉のぼうしをみつけて、なんだかおいしそうなものだと思って、草といっしょにたべてしまいました。そのうちに、うしは草をもぐもぐかみだしました。

トムは、自分がかみつぶされては大へんだと思って、大声をはりあげて、

「おかあさん、ここだよ。うしの口の中にいるんだよ。」
ど、どなりたてました。おかあさんは、

「おまえは、まあ。いったいどうしたらいいのだろう。」
と、いって、なきだしました。

そのうち、うしはおなかの中でへんな音がするので、気持が悪く
なってトムをはきだしてしまいました。おかあさんは、落ちて来る
トムをまえかけて受けて、やっと安心して家へ帰りました。

ある日、トムは野原へ遊びにいきました。あまり遠くにいったも
のですから悪ものからすにさらわれました。からすは、海に飛ん
でいって落としてしまいました。そこへ大きな魚がきて、ばくと、
トムをのみこみました。

まもなくその魚は、りょうしのみにかかりました。りょうしは、
いかにもりっぱな魚なので、これをアーサー大王のごてんにさしあ
げました。

料理人が、その魚のはらを切ってみると、中から小さな人間が飛
びだしたので、大さわぎになりました。

みんなでトムをつかまえ、王様のお目にかけました。

王様は大そうトムをかわいがって、いつもおそばをはなしません
でした。

みんなも、「チビ、チビ。」と、いって、トムはおしろのあいきょうも
のになりました。

(三) 海の生活

一 水泳

学校がすんでから、まさおくんたちは近くの海水浴場に行った。夏の日にはガラガラとteriつけて、やけつくようである。

みんなは、服をぬいで、したくをし、はだしになってすなの方へ歩いていった。

ジリジリやきつけているすなの上を、かかどをあげて、うくようにして歩いた。

海にはいると、水は思ったよりあたたかかった。

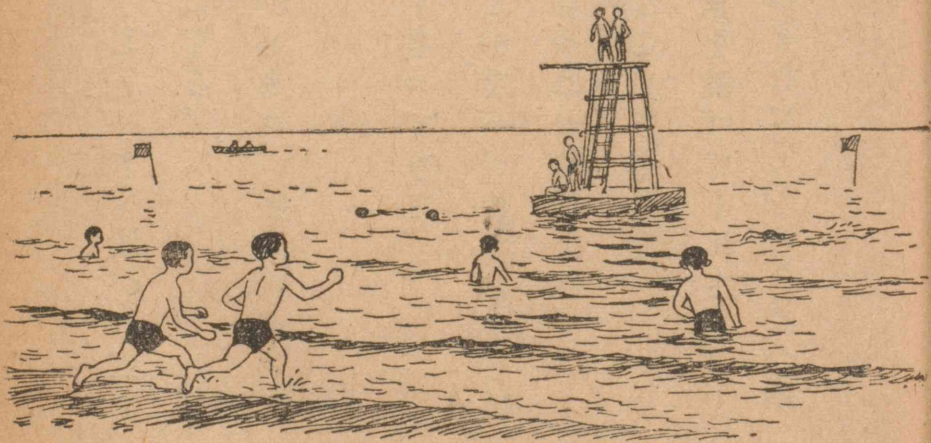
だれもかれも、にこにこしてうれしそうに泳いだり、走りまわったりしている。

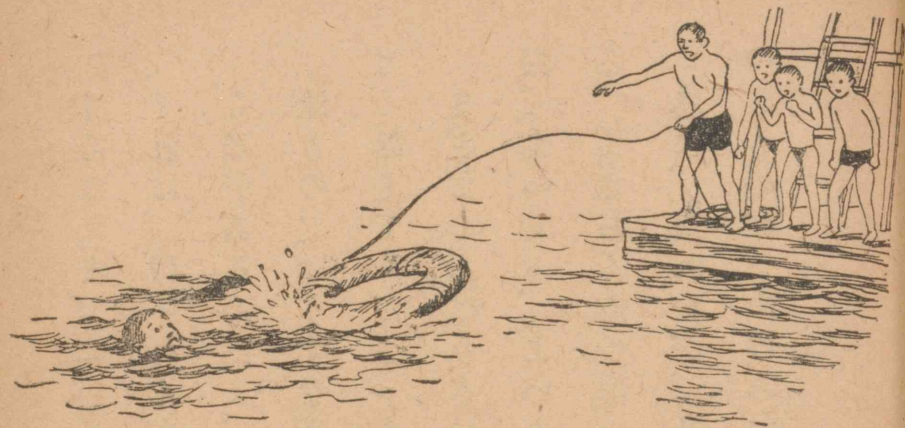
からだ中すなだらけにして、すな遊びをしているものもある。

まさおくんたちは、波うちぎわで体そうをした。

体そうがすむと、ざぶんと頭をぬらして、みんな泳ぎはじめた。

「さあ、向こうのとびこみ台までいこう。」
思い思いの泳ぎ方で、すうっすうっといでいく。





うきをひっぱってもらって、やっと、とびこみ台につくことができた。

「やれやれ、助かった。」

と、まさおくんがいかにもうれしそうにいったので、みんなは思わずわらいだした。

「あんなに泳ぎのじょうずなきみが、きょうは、いったいどうしたんだい。」

と、いさむくんがたずねると、

「どちゅうで急に足がいたくなって動かなくなっちゃったんだ。どうしたことだろう。」

と、まさおくんはふしぎそうである。

まさおくんもいっしょうけんめい泳いだ。ときどき、波がざぶーんとやってくる。そのたびに水をのみそうになる。

とびこみ台が目の前に見えてきた。もうひと息だ。手足にグツと力をいれると、からだがすうっと前に進む。

そのとき、どうしたことか急に足がいたくなってきた。

足をつこうとしたが、大へんだ。足がどかない。まさおくんはむちゅうで、手足をばたばた動かしたが、ちっとも進まない。

「もうだめだ。まさおくんはふつと、こんなことを思った。

そのとき、だれかがとびこみ台から、うきを投げてくれた。

これはありがたいと思って、まさおくんはそれにしっかりとつかまった。

すると、そばにいたどこかのおじさんが、

「それは、けいれんだね。泳いでいるとき、どうかすると、起こることがあるんだよ。水の中で、このけいれんを起こすと、どんな泳ぎのじょうずな人でも、おぼれることがあるんだ。」

と、話してくださいました。

まさおくんはうきにつかまって、みんながそれをひっぱって泳いだ。「よいしょ、よいしょ。」と、かけ声をかけて元気よく泳いで帰った。まさおくんのけいれんはすぐなおった。

急に、だれかが、「あ、かもめだ。」といったので、見ると白いニワのかもめが、山のみねをすれすれに飛んでいった。

二 かつじくんの町

まさおくんは、おかあさんといなかの町へいきました。そこは、おかあさんの生まれたところですよ。

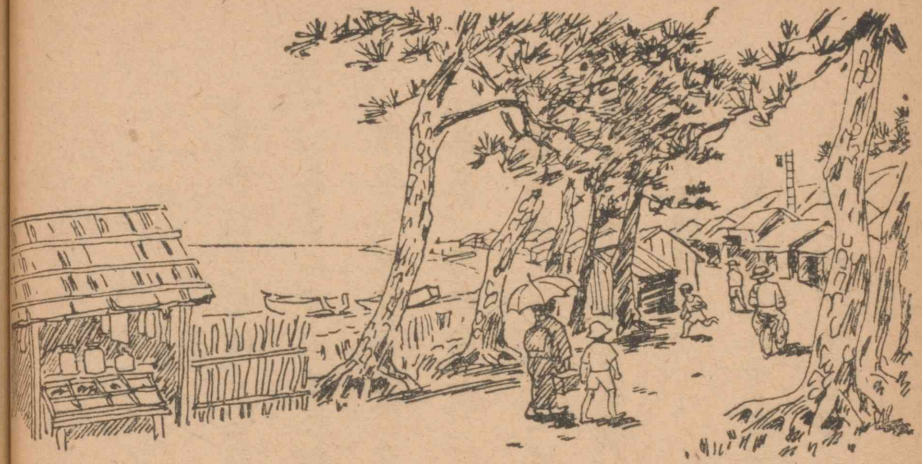
汽車をおりると、すぐ目の前にひろびろとした海が見えます。

「ああ、海の町だ。」

まさおくんは、こんなことを思いながら駅をでました。駅の前にはちよつとした広場があって、近くに、少しばかりの家がならんであるだけです。

いや、町ということができないほどのところですよ。

ところが、まさおくんたちといっしょに、ずいぶんたくさんの人



がおりました。

こんな小さな町にたくさんの方がおりるのをふしぎに思って、おかあさんにたずねると、

「よく見てごらん。」

と、いって、海岸の方を指さされました。

「ある、ある。」海岸にそったまつの木のかげに、家がうねうねとつづいていきます。

「この町は、あんなに細長いのですよ。」

と、おかあさんが教えてくださいました。

「おもしろい町なあ。」

と、まさおくんは思いました。

ふたりは、駅の前の道をおいて、町にはいりました。

しばらくいくと、しおのおいおいが、「ふうん。」と、してきました。

「やあ、海のおいだ。」

と、まさおくんは思わず大きな声をだしてしまいました。

道の両側には、魚をほしている家があります。はこにならべられ

た魚は、銀色に光って、まぶしいようです。

道ばたのあき地には、大きなあみがほしてあります。めがねをかけたおじいさんがあみをつくらっています。おかあさんが、

「おじいさん、こんにちは。ごせいがてますね。」

と、あいさつをすると、おじいさんは顔をあげて、

「ああ、お帰りか。」

と、やさしそうな目で答えました。

しばらくいくと、長いはしがありました。川の水は、ゆっくりと流れています。川口には大きな船、小さな船が、それこそくっつきあつたようにして集まっています。

子どもをおぶつた女の人が、ごはんをたいている船もあります。

あちらの船では、男の子がボール投げをして遊んでいます。船の子どもたちは、みんなはだかです。しゃくどう色にやけて、いかにもじょうぶそうです。おかあさんが、

「まさおさんも、ことしはあのくらい日にやけるといいね。」

と、いつて、にこにこなさいました。

「おうい。おうい。まさおくん。」

という声がきこえます。

見ると、向こうの方から大きな麦わらぼうしをかぶつた、これもしゃくどう色をした、男の子が走って来ます。

かつじくんでした。かつじくんは息を切らしながら、

「時間をまちがえたもんだから、おそくなっちゃった。」

と、いつて、びよこんとおじぎをしました。かつじくんが、

「はまの方を歩いていこう、近道だから。」

というので、三人はすなはまの道をさっくさっく歩いていきました。

○

波うちぎわにたくさんの人が、列のようになつて動いているのが見えます。

「えんやらほう、えんやらほう。」

という声が、きこえてきます。

まさおくんが立ちどまって見ていると、

「ああ、あれはじびきあみを引いているん

だよ。おもしろいだらう。」

と、かつじくんが教えてくれました。

近くにいつてみると、男の人も、女の人も、

子どもたちまでもまじって、いっしょ

うけんめいあみを引いています。

あみの中には、数えきれないほどの魚が、

ぴちぴちとおどっています。



夏の日キラキラと光って、はねているさまは、なんともいえな

いほどきれいなものでした。

まもなく、かつじくんの家につきました。まさおくんは、さっそ

くかつじくんと泳ぎにいきました。

その日の夕方のことです。

おじさんたちは、急にいそがしそうにじはじめました。まさおく

んはへんだなあと思って、

「もう暗くなるのに、どうしてそんなにいそがしいんですか。」

とたずねると、かつじくんが、

「いま、りょううにでかける用意をしているんだよ。りょううをする人

は夕方がいそがしいんです。夕方、船にあみを運んだり、油をつ

みこんだり、船のきかんを調べたりしておいて、夜中にりょうに
でかけるんだから。」

と、いいました。

「じゃ、ぼくもお手つだいをしよう。」

と、いって、まさおくんはおじさんのおべんとうを持って、海岸にい
きました。

「やあ、ごくろう、ごくろう。あしたの朝、うんと魚を取って来て
やるからな。きみたちは早くねなさいよ。」

と、おじさんは元気のいい声でこういって、船の中へはいつていか
れました。

つぎの日の朝、かつじくんが、

「もう、おとうさんたちが帰って来るころだよ。まさおくんもいつ
てみよう。きっと魚がたくさん取れているぞ。」

と、いって、起こしてくれました。

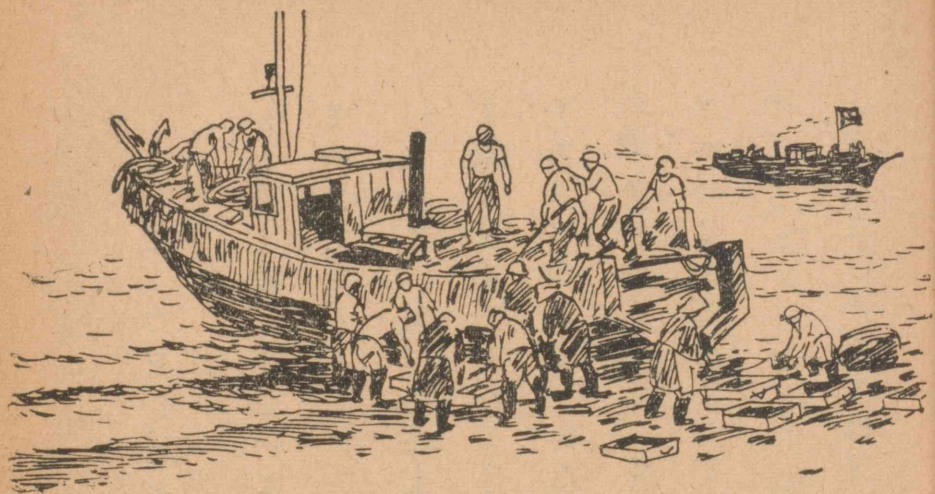
まさおくんは、ねむいのをがまんしてとび起きました。そとにて
てみると、まだうす暗くて、人の顔もはっきりわからないくらいです。
まさおくんたちが海岸にいつてみると、

「ほうい。ほうい。」

という声が、あちからからもこちらからもきこえます。

はこを持って来たり、荷車をひいて来たり、台を運んだりしてい
ます。みんな船をむかえるしたくをしているのだそうです。

そのうちに、だんだん夜が明けてきました。



いわしがいったばいになったはこは、海岸につみ重ねられます。みるみるうちに、いわしばこの山ができてしまします。こうしてつみあげられた魚は、トラックや荷車で、近くの市場に、駅に、かんづめ工場に、運ばれていくのだそうです。魚おろしの仕事ですむころ、もう夜はすっかり明けて、白い波が朝日にかがやいていました。

「あ、おとうさんたちの船だ。」
と、かつじくんが指さす方を見ると、大きな船が旗をひらひらさせて、こちらへ走ってきます。
おじさんらしい人が、さかんに手をふっています。
みんなが、「おうい、おうい。」といて、待っているうちに、おじさんたちの船がつかまりました。船の人が、
「たいりょうだぞう。」
と、大きな声でいうと、海岸で待っていた人が、船の近くに集まって来ます。
いよいよ、魚をおろすのです。船底から、大きなたもですくいあげたいわしが、ザアツとはこの中に入れられます。

三 ロビンソン・クルーソー

わたしは、小さいときから、世界中をどび歩きたいものだと考えていました。

しかし、父はわたしの考えをいけないことだといって、ゆるしてくれませんでした。

ある日のこと、わたしはにげだそうという気持などはなく、ハルの港へいきました。すると、ちょうどひとり友だちが、船でロンドンへいこうとしていて、わたしにもいっしょにいかないかとさそうのです。

そこで、わたしは父にも母にもそうだんせずいくことにきめてし

まいました。

これが自分のふしあわせのもとになるだろうなどは、少しも思いませんでした。

わたしは一六五一年の九月一日に、ロンドンいきの船にのったのです。

船が港をでて、まもなく急に風がふきだして、波がものすごく立ちはじめました。わたしは、これまでに一ども海にでたことがなかったものですから、ふなよいとおそろしさに、すっかり弱ってしまいました。

わたしは、このときはじめて、だまって家をとびだして来たことを、こうかいました。

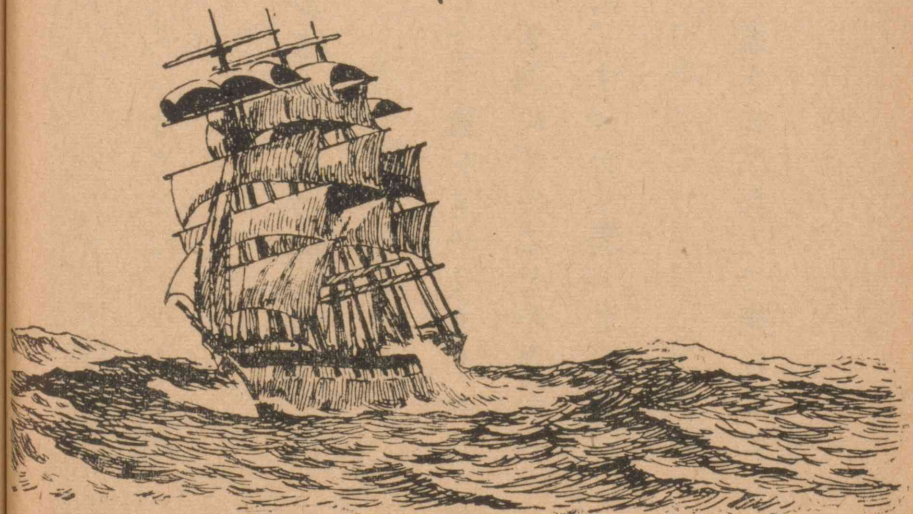
そうしているうちにも、あらしいよい
よはげしく、海はますますあれくるばか
りです。

大波がくるたびに、今度こそ船がひっく
りかえりはしないかと、心配しました。

わたしたちは、船をできるだけ軽くして、
しずまないようにくふうしました。

しかし、どうどう船の中に水がはいって
しまいました。その上、いかりが切れてし
まいました。

船長は、しきりに合図をして助けをもと



めました。

すると、わたしたちの少しさきにとまっていた大きな船が、わた
したちを助けるために、ボートをだしてくれました。

波が高いので、ボートはなかなか近づくことができません。

わたしたちは、やっこのことでボートにのりました。が、今度は
ボートをだしてくれた船に帰ることができません。

わたしたちがボートにのってから、十五分たつたたないうちに、
わたしたちの船は、しずんでしまいました。

波はだんだんひどくなっていきます。ボートはどうすることもで
きず、波のまにまに流れていくばかりです。

それから、どのくらいたってからでしょうか。いつのまにか、わ

たしたちはヤルマスの近くに流れつきました。

そこでは、さいなんにあつた人たちだというので、町の人が大へん親切にしてくれました。

りっぱなやどやを世話してくれたり、ごちそうをだしてくれたりした上、ロンドンへいくなり、ハルの港へ帰るなり、めいめいのすきなようにしなさいといって、お金をたくさんくれました。

わたしは家へ帰ろうかと思いました。

しかし、近所の人にわらわれることもつらいし、父や母にあうことも、はずかしいと思つたので、アフリカ通いの船にのりこむことにしました。

この船は、水夫たちの間では、「ギニーいき」といわれているもの

です。

しあわせなことに、わたしは大へん親切な友だちにあいました。

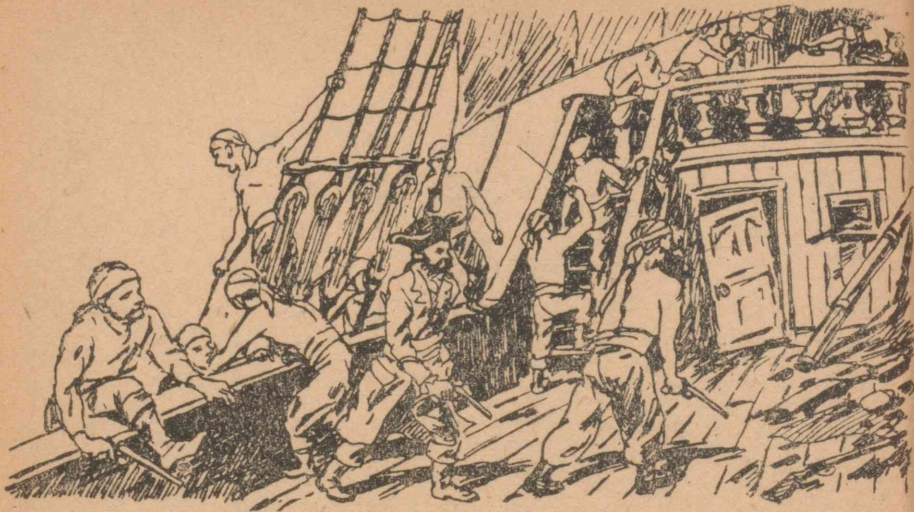
この人は船長で、前にもギニーにいったことがあり、そこでせいかうしたので、もう一度、でかけようとしているところでした。

この船長は、はじめてあつたときから、わたしのいうことをおもしろいと思つたのでしょうか、いっしょにギニーにいこうと、さそつてくれました。

わたしはすぐ、その気になつていくことにしました。

このたびの航海は、すばらしいものでした。波もなく、毎日いいお天気つづきで、なにごともなくギニーにつくことができました。

この親切な船長のすすめで、わたしはギニーでいろいろなもの



一度にてっぼうをうちはじめました。
わたしたちが、ぐずぐずしている間に、六
十人ばかりのかいぞくが、こちらの船にのり
こんできました。
そうして、ほ柱を切ったり、船のどうぐを
こわしたりしました。
その上、わたしたちのうち三人は死に、八
人はけがをしてしまいました。
わたしたちは、仕方がないので、こうさん
しました。
それから、ムーア人の港のサレーというと

買って帰りました。

その品物をロンドンで売ると、買ったときのなん倍にもなりまし
たので、わたしはいちどに金持ちになりました。

それから二年ほどたって、わたしはもう一度ギニーに行くことに
しました。もっと金持ちになりたいと思ったからです。

船がどんどん進んでいきました。ある日の明け方、わたしたち
はムーア人のかいぞくに追いかけられました。

わたしたちは、いっしょうけんめいに逃げましたが、かいぞくの
船の方がはよいのです。どうとう追いつかれてしまいました。

わたしたちが、八ちょうのてっぼうをうちだすと、かいぞく船は
さっとひきましたが、すぐひき返して来て、二百人ばかりのものが、

ころに連れていかれました。

どんなことになるかと心配しましたが、わたしだけは遠くにやら
れず、かいぞくの船長の所で働くことになりました。

それからなん年かたって、わたしはふとしたことからにげだそう
と思いました。

そのころ、わたしの主人は家にぶらぶらしていました。お金がな
くて、船もだせなかつたらしいのです。ボートにのって、いつもつ
りにでかけてばかりいました。

つりにいくときには、わたしと、ムーア人のジューリーを連れて
いくことにしていましたが、わたしがつりで、すばらしいうでまえ
を見せてからは、ときどきジューリーをつけて、わたしに魚を取り

にいかせるようになりました。

ある日のことです。主人は、お客さんといっしょに、りょうにいく
ことになりました。それは大へんな用意で、前のばんから、船いっ
ぱいたべものをつめこみ、わたしには、三ちょうのてっぽうをよく
みがくように、いいつけました。魚ばかりでなく、とりもうどうとい
うのです。

わたしは、いいつけられた通り、すっかり用意をして主人を待っ
ていました。すると、主人はひとりやってきて、お客さんは用事が
あって来られないから、いつものようにジューリーを連れて、その
ボートで魚を取って来いといいつけました。

そのとき、わたしはにげるのはいまだと決心しました。

わたしは、主人が帰ってしまおうとすぐ、にげるしたくにかかりました。ジューリーをうまくだまして、たべものや水をたくさんつみこみました。おのや、つちや、糸や、なわまでも用意しました。こうして、いろいろな物をつんで、なに知らぬ顔をして港をでました。

しばらくいって船をどめ、つりをしましたが、少しもつれません。というのは、はりに手ごたえがあつても、わたしは引きあげようとはしなかったからです。わたしが、

「ここじゃつれないよ。もっと遠くへいこう。」

というど、なにも知らないジューリーは、すぐさんせいして、ほを高くはりました。

しばらくいってから、わたしはジューリーのそばによって、急にうでをつかみ、

「おい、ジューリー。おまえはわたしのいう通りになるか。」

というど、ジューリーは、なんでもいう通りになるし、どこへでもついていくから助けてくれといいました。

こうして、わたしはジューリーを連れてにげはじめたのです。

南へ南へと船を十日あまりも走らせているうちに、たべ物が少なくなってきました。

あるとき小高い山の下に、どうしようかと思って、ボートをどめて休んでいました。ふと見ると、山の上に大きなししがねています。

わたしは、てっぼうをうって、その前足をくきました。

ししは、三本足で立って、「ウォーッ」と
うなり声をあげました。

わたしは、もう一ぱつ、今度は頭にう
ちこみました。

ししは、ぱたりと地上にたおれました。
ジューリーとわたしは、一日がかりで毛
皮をとり、二日ほどかわかすと、りっぱな
しきものができました。

わたしたちは、それからなん日もボート
を走らせました。どこかの大きな船にあわ
ないかと、そればかり楽しみにしていまし

たが、どうしてもであいません。

たべ物は、いよいよなくなってきました。

「もうだめだ。このボートの中で死ぬよりほかはない。」と
思っ、あきらめているときでした。遠くの方から一そらの船が走
ってくるのを、ジューリーが見つめました。

わたしたちは、ほをいっばいにはって、その船の方へ急ぎ
ました。やっと追いつくことができて、わたしはその船の船長に、
自分はイギリス人だが、サレーのかいぞくにつかまえられてこま
まっているということ、くわしく話しました。船長は、わたしの
気持ちをすぐわかってくれて、心よく助けてくれました。

それから二十日ほどしてわたしたちは無事サントスにつ
きました。



(四) きれいな空

一 秋はどこに

夏休みが終つて、また、学校がはじまりました。日にやけた子どもが元気よく校門をくぐります。運動場に、教室に、楽しそうな声があはれます。長い間しずかだった学校が、急に、にぎやかになりました。

そのころ、向こうの山の上に、むくむくとあがっている入道雲を見ることがあります。ときには、かみなりのなる音をきくこともあります。日の光は強く、人々は、まだ夏のよそおいです。夜、庭に

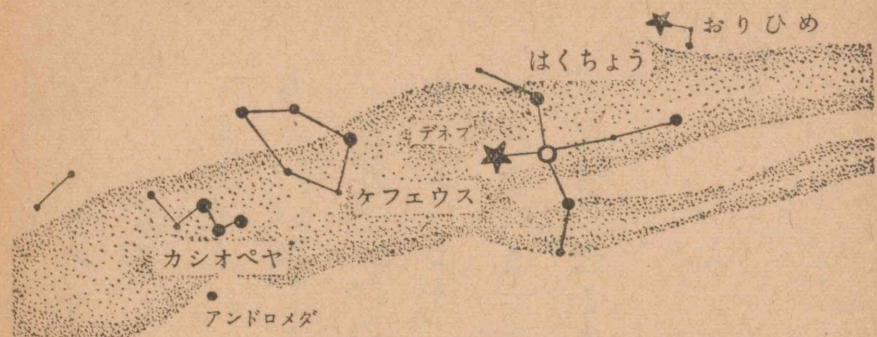
集まつて、うちわをつかしながら楽しそうに話し合つて、夕すずみをしているのを見ることがあります。

しかし、うらの畑のひまわりはのびるだけのびて、大きな花が、なかば茶色にかわっています。下の方の葉が、かれかかっているのも見えます。かきねのあさがおも、あの夏の朝のような生氣はありません。色はあせて、おそざきの小さな花を、葉かげにつけています。

草花が、秋の来たことを知らせてくれます。

とりわけ、夕すずみのとき、目の前を流れた星を見た子ども、「あ、流れ星。」という声に、おもわず見あげる夜空の美しさほど、

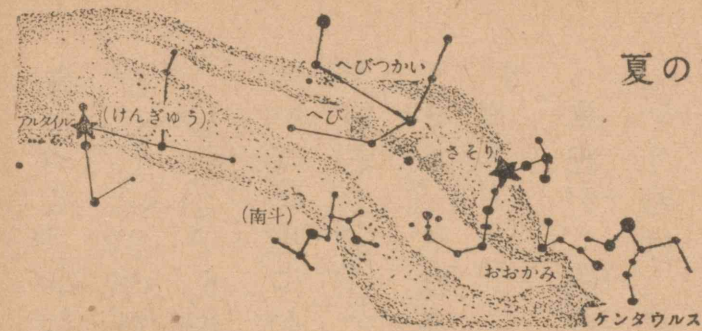
秋の来たことを感じさせるものはありません。



あまの川を中にして、またたく星をながめていると、ものいわぬ星が、なにか、わたくしたちに話し

ます。あまの川に美しい光をうかべています。山登りや、旅をするとき、方角を知るのによくつかわれる北極星も、北の空の中ほどにまたたいています。

あまの川をはさんで、西におりひめ、東にけんぎゆうのふたつの星が、あう日を楽しむかのように、なかよく光っています。さらに、北東の方に、はくちょうがはねを広げたような十字の星、つづいて、「W」の字のような星が、



夏の夜空の あまの川

すみきった高い夜空に、たくさん星がまたたいています。大きな星があります。小さな星もあります。強い光の星が見えます。弱い光の星も見えます。青白く光っている星も見えます。

広い夜空に、しずかに、またたきます。なんと美しいことでしょう。

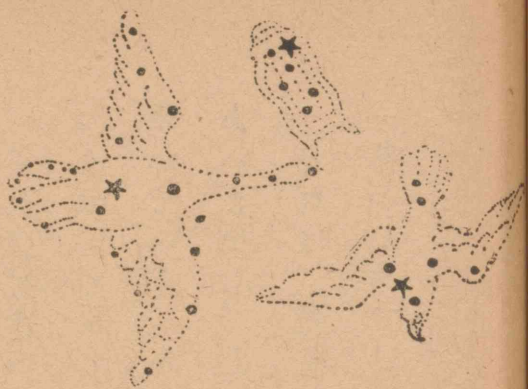
わけて、夏のはじめは、東の空に見えていたあまの川が、だんだん高くなってきて、このころは、真上にかかっています。北東から南西にかけて、銀のすなをまいたように、長々と夜空をくぎって、はつきり見えます。

かけてくれるようです。わたくしたちを遠い世界にひきこんでくれるようです。

星を見ては、心をふるいたたせた人々のことは、むかしから、数多くいつたえられています。

星についてのいつたえも、東洋に西洋に、むかしから、数多く残っています。

夜空にまたたく星は、かなしみにしずむ人にも、喜びにあふれる人にも、光をあたえてくれているのです。

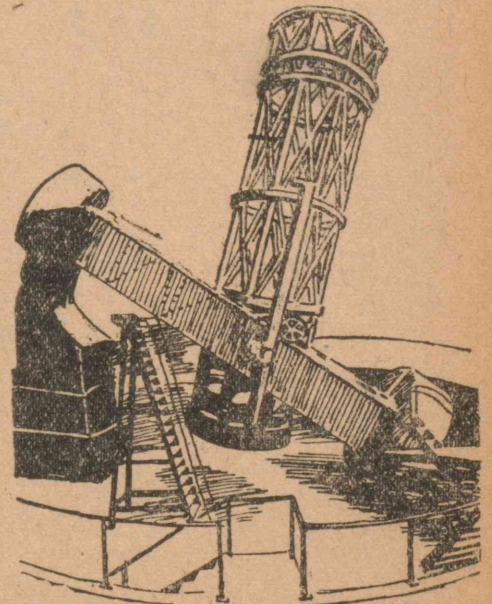


二 星の世界

夜空をながめると、数かぎりないほどたくさん星が、光っているように見えます。しかし、目で見ることができるのは、二三千ぐらいの数です。大きな望遠鏡で見ると、もっと多くなります。世界で名高い望遠鏡は、アメリカのウィルソン天文台にあるものですが、それで見える星は十億もあるということです。

その星のほとんどは、みんな自分で光を発してかがやいているのです。太陽も、そのなかまのひとつですが、空の星が、太陽とくらべてずっと小さく見えるのは、どうしてでしょう。

それは、ずいぶん遠いところで光
っているからです。もし、近くへよ
ると、太陽とおなじ大きさに見え、な
かには、太陽よりずっと大きいのも
たくさんあるのです。



それは、どうしておしはかるのでしよう。わたくしたちが、ふつう
用いている、メートルやキロメートルなどの単位では、とてもまに
あいません。そこで、もつと大きな単位を用いてはかります。

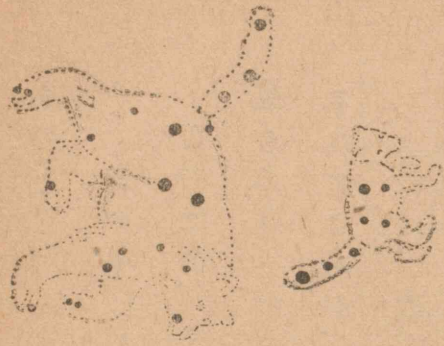
それは、「光年」という単位です。一光年は、光が出發してから、
一年かかってとどくきよりをさしていいいます。光の早さはすばらし

いもので、一秒間に地球を七まわり半します。この早さで計算しま
すと、太陽から発した光が、地球にとどくまでには、やく八分二十
秒ばかりかかることになります。

ところが、光のとどく時間ではかると、あの星と地球とのきより
は、二十分や三十分ではありません。五日や二十日でもありません。
五か月や八か月でもありません。「光年」を単位とし
て計算しなければならぬほど、遠いきよりにある
のです。

さて、空の星は、地球からどのくらいのきよりに
あるのでしょうか。

二十光年の星もあり、三十光年の星もあります。



あのたなばたものがたりのはたおり星は、二九・五光年ですから、やく三十年ほど前に発した光だというわけになります。

このほか、五十光年の所に光っている星があります。百光年の星もあり、一千光年の星のむれもあり、一万光年の星もあります。それどころか、十光年の星もちらばっています。

さらに、近ごろでは、りっぱな望遠鏡がつくられてきて、ますます遠いきよりの星がはかられ、なん千万光年という星のあることもわかりました。

ところで、空の星の中には、あまの川のようにたくさんの星が集まったのがあります。なん千なん万という星が重なりあって、あのように、ぼうつとした銀の川のような光をはなっているように見えるのです。

秋の夜、あまの川を中にして光っている、たくさん星を見ると、なんともいえない大きな深い感じにうたれます。

しかも、このうちゅうは、だいたいきまりよく動いているということです。

このきそくただしいちつじよは、いったいどうしてたもたれていくのでしょう。

三 こまと星

そのころ——わたしの小学四年のころ——こまをまわして遊ぶことがはまりました。

こまの大きさは、さしわたし五センチほどで、木でこしらえたものでした。心ぼうと、わは、てつでできていました。

まわす時には、一メートル半ばかりのひもを心ぼうの所からくるくるまいて、ひものはしを持って、いきなり地面に、投げだすのです。

投げだされたこまは、はずみをくったように、そのへんを勢よくまわります。やがて、こまはおちついてきて、ひとところにとまり、少しもからだを動かさず、じっとすわったようにまわります。わたしたちは、この時を、「すんでいる」と、いいました。

しばらくすんでいると、こまは、頭をこくりこくりとふりだします。すると心ぼうも、よろめいてきて、くらりとこけてしまいます。友だちがみんな、おもしろそうにこまをまわしているのを見ると、わたしもほしくなって、こまを買ってもらいました。

新しいこまにひもをまきつけて、見よう見まねで、地面に投げだしてみました。すると、まわるどころか、石ころかなんかのよう

に、ころがりとんでいってしまいました。拾ってはひもをまき、まいては、投げってみました。けれども、こまはいっこうまわってはくれません。なんのぞうさもなくまわし

ている友だちのこまが、ふしぎでたま
りませんでした。

そこで、わたしは、友だちのやりか
たをよく見ることにしました。こまを
まくひもでも、ゆるくまいたのでは、
だめなことがわかりました。ひものは
しを、小指にちよつとはさんでおくこ
ともわかりました。親指と人さし指で、
こまのわをしつかりにぎって、心ぼうがまっすぐになるように、地
面にほうり投げることもわかりました。

それから、なん十ぺんこまを投げたことでしょう。投げているう



ちに、ひよいとこまが立ちました。立って二三秒まわりました。そ
の時のうれしさは、今もわすれることができないほどです。

夕ぐれのことでしたが、わたしはとりつかれたようになって、今
まわした手心を、くりかえしくりかえしてこまを投げました。こま
は弱い勢ですが、そうどうまわるようになったのです。

いつのまにか大きな月がのぼっていて、うす暗い土の上で、わた
しのこまは動いていました。

やがてわたしは、らくらくとこまをまわすことが、できるようにな
りました。力いっぱい投げだしても、こまはころげることなく、
勢よくまわりました。勢よくまわる時には、「ブラン、ブラン」と、
音をだしているように思われました。まわっているこまを、入さし

指と中指との間で、ひよいとはさんで、左手の手のひらにのせることもできました。のせられたこまは、手のひらですんでまわりました。それを見るのが、ほんとうに、楽しいことでした。こまのまわっている間、わたしはまるで、まほうつかいにもなったようでした。

こま遊びには、いろいろなものがありました。ひもでつるしてまわしたり、ふたつのこまをまわしておいて、どちらがさきにとまるかためしたり、外のこまをはじきだしたりしました。

けれども、わたしの一ばんすきであったのは、手のひらの上ですんでまわるこまをながめることでした。

もし、このこまが、とまることなく、いつまでも、手のひらでま

わっていたらどんなだろう。どんなにおもしろいだろうと、思ったものです。なんとかして、とまらないこまはないものかとさえ思いました。

春もすぎて、そろそろ夏になるころでした。新聞にほうき星があらわれるということがありました。小さかったわたしには、このことが、どんなことかよくわかりませんが、二人のあねたちは、そのことをいろいろ話していました。そうして、二人ともこわがっていました。

「もし、ほうき星が、地球につきあたったら、どうなるのかしら。

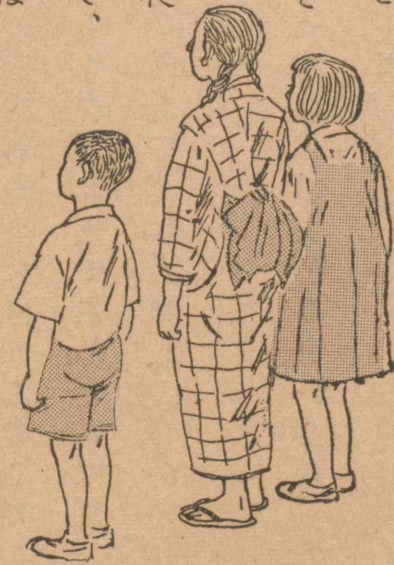
地球がこわれてしまうのではないかしら。」

ほうき星と地球とは、どんなことになるのか、どんなかんけい

あるのか、わたしにはわからないだけに、少しもおそろしいことに思いました。かえって、おもしろいと思えました。

「いよいよ、ほうき星のあらわれる夜になりました。二人のあねとならんで、わたしもほうき星を見つけました。ほんとうにほうき星のような形をした、白光りのするものが、暗い空にかかっています。」

「あのほうきで、地球をたたかれたら、わたしたちはどうなるの。」
あねたちは、そんなことをいったようですが、わたしは、その夜、



あたりが大へんしずかであったことをおぼえています。

まもなくほうき星は、とおのいていきました。地球にもあたらず、ほうきでなでつけもしないで、きえてしまいました。

ほうき星のことから、あねたちは、天体のことに心がひかれるようになりました。本を読んだり、せいぎを調べたりしていました。

父が、どこからか望遠鏡を借りてきてくれました。それで夜になると、あねたちは、この望遠鏡を外に持ちだし

ては、星をのぞくようになりまし。わたしにも星の名を、いろいろと教えてくれたのですが、ほとんどわすれてしまいました。

望遠鏡も、なん度ものぞかせてくれたのですが、それもどんな形であったか、どのくらい光っていたものか、わすれてしまいました。それよりも、見ようとする星を望遠鏡でとらえることが、ひとほねであったことをおぼえています。

すべてわすれてしまった星の形の中で、ただひとつ、きおくに残っているものがあります。それは土星です。

外のどの星も、みんなまるい形をしているのに、土星だけは、ぼうしのつばのようなわをはめていたからです。まるで、おもちゃかなんかのよう、おもしろい形をしていました。

「ねえさん、あれなあに」。

わたしは、おどろいてたずねました。はじめ、わたしは、星といえば、あの五角になってどがつている形を考えていました。それが望遠鏡で見て、そんなものではなく、どの星もまるい形をしていることを知りました。

ところが、この土星だけは、大きなわをつけているので、すっかりおどろいてしまったのでした。

「へんなものがついているね、ねえさん」。

あねはそれについて、なんとかいろいろ答えたらしいのですが、それもおぼえていません。ただひとつおぼえていることは、あのかつばのようになっている土星のわは、小さな星がたくさんならんで、

それがまわっているのだということ。それに太陽の光があたるので、あんなに明かるく見えるということでした。

「まわっているんだって、ねえさん。」

「まわっているのよ。」

「いつからまわっているの。」

「そんなこと、わからないわ。」

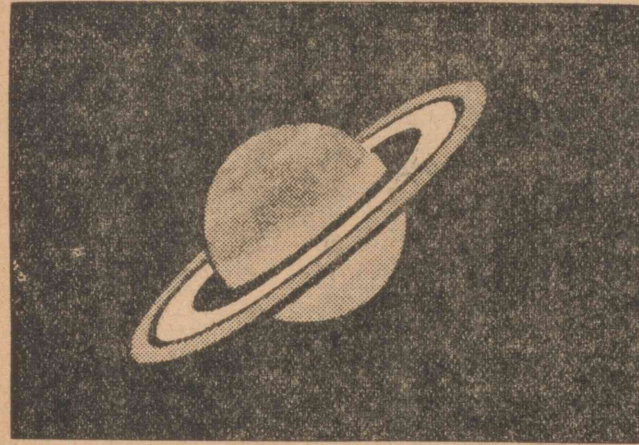
「ひとりでもわっているの。」

「そうよ。」

「いつまでまわっているの。」

「わからないわ。」

わたしには、それらのことが、どうして



もわすれることのできないものでした。

そののち、図画の時に、わたしは、この土星をかいたことがありました。あたりをすっかりうすずみでぬって、土星だけを白く残したものでした。それが教室のかべにはりだされたので、いつそう土星は、きおくに残ったのだと思います。

わたしもだんだんと大きくなって、こま遊びをやめてしまい、このことなどもとつくにわすれてしまいました。天体のことには、きょうみを持つようになりました。

土星のわは、岩のかけらや、小石のようなものにちがいないこと、それも、氷やドライアイスで、できているかも知れないことなどもわかりました。そうして、これらの小さな星が、みんなぎょうぎよく、

ぐるぐるまわっているものだということもわかりました。

天体のことを知るにしたがって、わたしの心をひいたのは、太陽もどの星も、ほとんどまわり動いているということでした。

自分でまわりながら、大きな所をまわっていることもわかりました。

地球が一日に一度自分でまわって、一年かかって太陽のまわりを大きくまわるように。

土星もやはり、地球のきょうだいで、太陽をまわっているのです。しかも、そのまわりかたが、みんなきちんときまっています。

なん千という星、なん万という星が、それぞれただしいまわりかたをして、動いていることには、おどろくほかはありません。

こまのようなあんなに小さなものを、ひとつまわすにも、よくなれた手つきと力がかかります。たとえば、どんなに力いっぱいだしてまわしたとしても、こまはせいぜい三十秒ほどでたおれて、とまってしまいます。

天体にむらがつている、いくたのものをまわしたり、動かしたりするためには、すばらしい力がなければならぬはずで。

そのすばらしい力を考えていると、わたしはいつでも心がすんできます。

(五) 森の子ばと

森のはどのなかまには、子ばとが飛べるようになる、勉強のため、世の中のことを見せにやる、しきたりがありました。それも親ばとが連れていくのではなく、子ばとだけでいかなくはならないのです。そうして、五日の間に世の中のきれいなところを勉強して帰って来ると、はじめてりっぱなはとになるのです。もし、心がけがよくないと、悪いことやおもしろいことに心が迷い、どうてい五日目には帰って来ません。帰って来なければ、親ばとは死んだものと思つて、あきらめてしまふのです。ですからこの五日の旅は、子ばとがりっぱになるか、悪くなるかのしけんなのです。

きょうも一わの子ばとが、旅にでることになりました。

「さあ、いっておいで。いいかい。世の中のきれいなことを見て来るのですよ。」

「では、いってまいります。」

子ばとは元気いっばいの声でいって、あけがたの空を東へ飛んでいきました。

子ばとのかげはみるみるうちに小さくなって、はりの先でつuitたほどの点になったかと思つと、どうどう空の中にかくれてしまいました。



おとうさんばとおかあさんばとは、心細そうな顔をして、空をいつまでもながめていました。

はねにまかせて飛んでいった子ばとは、飛びながらも下の方を見て、きれいなことはないかと、たえず心を配っていました。下のけしきはどんどんかわって、今まで森の中で見たこともないものが、つぎからつぎへと目にうつりました。

ところが、その日のおひるすぎになっても、きれいなことが見つからないので、少し心配になってきました。

「こまったなあ、世の中のきれいなことは、どこへいったら見られるのだろう。」

ひとりごとをいいながらある山かげを飛んでいると、きれいなゆりの花が、谷川の岸にさいているのに気がつききました。



「世の中のきれいなことって、きっと、あのゆりの花のことだろう。きれいな心を持っていなければ、あんなに美しくはさけない。」
子ばとはそう思いながら、ゆりの花のところへおりて行ってたず

ねました。

「もしもし、あなたはたいそう美しいかたなのに、なぜこんな山かげにさいていらっしやるのですか。美しいおすがたが、だれの目にもつかないということ、ほんとにおいしいことではありませんか。」
ゆりの花は、はずかしそうにからだをゆすぶっていいました。

「いいえ、わたしはそんなに美しくありません。なぜこんな所にさくか、と聞かれると、わたしは返事にこまります。でも、美しくさきさえすれば、きっといつかはだれかのためになるだろうと思つて、わたしは自分のつとめをおこたりません。わたしのつとめは、美しくさくということです。」

その時、谷川の向こう岸にひとりの男の子がやって来ました。

「ねえさんのすきな、白いゆりの花はないかなあ。」

すずしい風が、男の子のつぶやきをのせて来ました。ゆりの花はそれを聞くと、

「自分を役に立たせる時が、どうとう来たようです。」

といいながら、草の間からのびあがるようにして、早く男の子の目につくようにしました。男の子はそのへんをさがしまわっていましたが、ふと顔をあげてゆりの花に気がつくと、

「ああ、あつた。あそこにあつた。きつとねえさんが喜ぶよ。」

といいながら、すぐ谷川をわたって来ました。

ゆりの花は、それから三十分とたたないうちに男の子につまれて、森の中の小さなおはかの前に、そなえられたのでした。

「きれいな世の中だ。」

子ばとはすっかり感心して、おほかの前におりて、ゆりの花に向かつていいました。

「あなたのおっしゃったとおり、とうとうりっぱなおつとめをなさいましたね。」

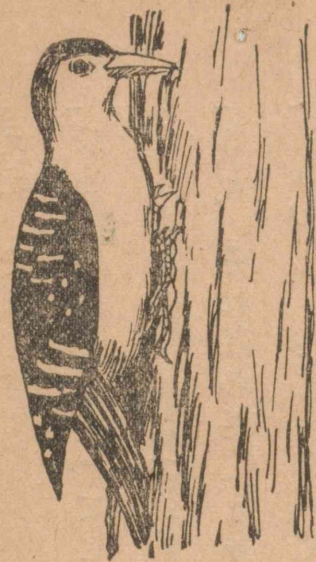
ゆりの花はさもうれしそうに、「ええ。」といって、にっこりわらいました。

つぎの日も子ばとは、なにかきれいなものを見たいと思いました。それで、森の中を飛んでみました。すると、大きな木にきつつきにとまって、こつこつとくちばしでみきをつついていました。

子ばとはふしぎに思って、そばへ行ってたずねました。

「きつつきさん。いったいなにをしていらっしゃるんですか。」

「おや、これはまあ、子ばとさんですか。なにをしていらっしゃる。わたしは電信をうっているのです。わたしのおかあさんは、遠くの動物園へつれていかれたのです。だからこうして、電信をうっているんですよ。」



「電信ってなあに。」

「遠くにいる人に、こちらの心をつたえることができるんですよ。」

「まあ、そうですか。それでは、あなたはそのおかあさんにうっているんですよ。」

「ええ、そうです。」

「でも、ただそうやってこつこつ木をたたくだけで、あなたの心持が、おかあさんにつたわるでしょうか。」

「さあ、それはわたしも知らないのですよ。」

「ずいぶん、たよりないですね。」

「でも、聞えても聞えなくても、いっしょうけんめいに、こうしてうっている間は、おかあさんのことを思いだして、とても楽しんでますもの。」

そういわれてみると、子ばとはきつつきの心のきれいなのに、感心せずにはいられませんでした。聞える聞えないということよりも、おかあさんをわすれないということが、ほんとにりっぱなことだと思

いました。

「よくわかりました。あなたがただこつこつと、電信をうつまねをしている気持は、とてもきれいですね。」

子ばとはそういういいましたが、きつつきはなにもいわず、また、こつこつと電信をうつまねをはじめました。

「では、さようなら。」

子ばとは森をでて、また、空高く飛んでいきました。

三日目には、こんなことを見ました。

ある小さな町の学校のそばへ飛んでいった時、ちょうど学校がひけて、二年生くらいの子どもたちが、赤いほつぺたをかがやかせな

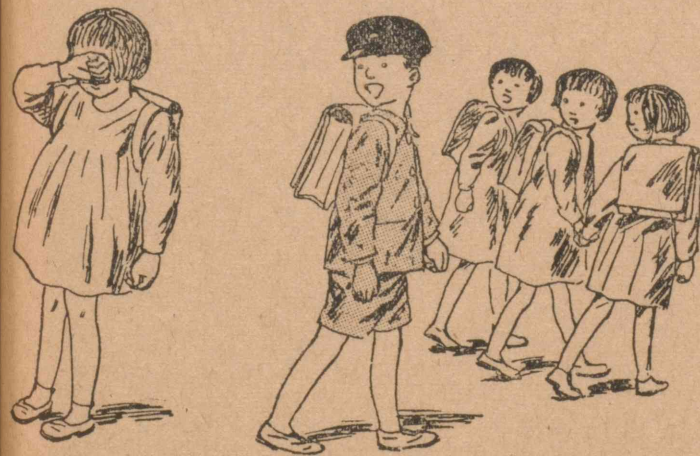
がら、帰っていくところでした。ふと気がつくど、ひとりの女の子がーばんあとから、しくしくなきながら帰っていきます。子ばとは「おや、どうしたのだろう。」

と思つて、そのあたりをぐるぐる飛びまわりながら、

じつとようすを見ることにしました。

「やあい、まだないてらあ、弱虫だなあ。」

そういつたのは、見るからに意地の悪そうな男の子でした。その声につれて、ひとかたまりになっていた子どもたちは、あとをふり返つてはやしたてました。



「なき虫、け虫

はさんですてる——。」

みんなからはやしたてられたので、女の子はたまらなくなつたらしく、道のそばの草の上につぶして、なきじゃくりました。

ところがその時、学校からひとりの男の子がでて来ました。草の上につぶしてないでいる女の子を見ると、急いでかけよつて来て、「あつ、またいじめたんだねえ。」

どいつて、女の子をかかえるようにして立たせ、自分のハンカチでなみだをふいてやりました。

「あいつらは、いつも弱いものいじめをするんだ。よし、きょうこそあいつらをひどい目にあわせてやる。」

この男の子はきりつとした、りこうそうな顔をしていました。子
ばとは、なんとやさしい男の子だろうと思いました。

女の子は、まだなきじゃくりながら、

「いいの、いいの、あなたのいない時にまた、しかえしをされるか
ら。」

といって、頭をふりました。

「だいじょうぶだよ、よくいってきかせるから。——そんなに心配
しなくてもいいよ。」

男の子はそういって、どんどんみんなのあとを追いかけてきました。

そうして、いつでも一ばんはじめにいじめる男の子を、どうどうつ
かまえていいいました。

「おい、なぜきみは、あんなかわいいそうな子をいじめるんだ。」

ただししいことにはかなわないので、その子はすっかりこまって、
顔をしかめていました。

「さあ、いえよ。どういうわけにいじめるんだい。」

いじめた意地悪っ子は、うつむいてしまいました。

「あの子がきたないきものをきているから、ばかにするのさ。よそ
からきた子だから、ながまはずれにするのさ。」

意地悪っ子は、やっぱりうつむいていました。

「悪いと思ったら、きみはあの子にあやまるんだ。さあ、来たまえ。」

男の子はそういって、ぐんぐん意地悪っ子をひっぱって、かわい
そうな女の子のところへ来ました。外の子どもたちは、この男の子

の勢におそれて、遠くの方へにげていってしまいました。

「もうこれからいじめないから、かんにんしてね。」

意地悪っ子は、頭をさげました。

「よし、二度といじめたら、今度こそは

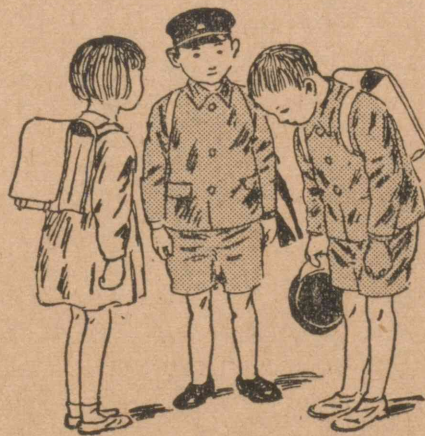
ゆるさないよ。」

男の子はそういって、意地悪っ子をゆるしてやりました。

それを見た子ばとは、

「ああ、なんと勇氣のある、りっぱな子だろう。これも世の中のきれいなことのひとつだ。」

と考えて、なにか男の子にお礼がしたくなりましたが、べつにこれ



とってあげるものもありません。そこで、一ばんやわらかなむねの毛を一本、くちばしでぬいて、男の子にかけているかばんの中へ、そっと入れて、また町の上を飛んでいきました。

四日目の夜のことでした。明かるいお月さまにてらされて、空はかがやいていました。すずしい風がそよそよふいて、なんともいえない、いい気持ちでした。それでも子ばとは、朝からまだきれいなことに、いきあたらないので、少し心細くなっていました。つばさはたはたとならして、月の光をたよりに、あちこち飛びまわりながら、どうかしてきれいなものを見たいと思いました。すると、ふいにこんなことばが聞えてきました。

「ねえさん、お月さまはどうして、ぼくたちのあとをついていらっしやるのでしょ。ぼくが歩くと、そうら歩いて来るでしよ。ぼくがとまると、やっぱりとまるよ。ほんとにお月さまはおかしいな。」

その時、また、ちがった声が聞えました。

「あなたがおりこうだから、送って来てくださるのよ。」

子ばとは声のする方を見ました。そこにはふたつの人かげがありました。小さい方がおとうと、大きい方がねえさんだということが、すぐわかりました。

「それじゃ、お月さまはやさしい方なんだね。あらっ、ぼくがまがったら、やっぱりまがっていらっしやったよ。」

「ええ、そうね。」

ふたりは今、道のまがりかどをまがったところでした。子ばとはそつと、ふたりのあとからついていきました。

やがてふたりは、家の前に来ました。

「お月さま、どうもありがとう。」

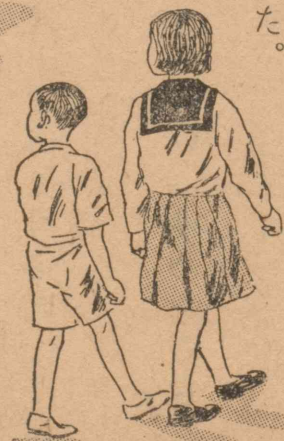
おとうとさんは家へはいろうとしな

がら、送ってきてくれたお月さまに、

大きな声でお礼をいいました。

「ほんとに、なんてかわいらしいぼっちゃんだろう。どんなことでも自分にむ

すびつけてお礼をいうのは、たしかにきれいな気持だ。そうだ。こ



の気持をうしなってはいけない。この気持さえうしなわなければ、他人をにくむようなことは、けっしてない。」

子ばとは、そんなふうに考えました。そうして、きょうも世の中のきれいなことを見て、たいへん勉強になったと思いました。それで、おとうとさんのすがたが、家の中へかくれようとする時、子ばとは、こういわずにはおれませんでした。

「かわいいぼっちゃん、しずかにお休みなさい。いいゆめをぐらんなさいね。」

その夜、子ばとはこのぼっちゃんと遊んだゆめを見ました。

あくる朝になって、子ばとが目をさました時には、もうお日さま

は高く上っていました。

子ばとはびっくりしてとび起きました。きょうはいよいよ旅もおしまいで、なつかしいおとうさんやおかあさんの所へ帰るのだと思うと、なんとなく気持がそわそわしました。あさごはんを急いですませると、すぐ西の方をさして飛んでいきました。

おひるすぎ、こんもりと木のしげっている大きな山へさしかかりました。するとふいに、

「おい。」

と、あらあらしい声でよびとめたものがありました。子ばとはおどろいて声のした方を見ると、一わのとりが太いまつの木にとまって、ぎよるぎよる目を光らせていました。

子ばとは、おとうさんばとから話に聞いていたので、おそろしいわしだなどいうことが、すぐわかりました。

「なぜ、だまって通るのだ。」

と、わしはどなりました。



「あなたがそこにいらっしやるのを、知りませんでしたから。」と、子ばとはすなおにいいました。

この時、子ばとはもうすっかりあきらめていました。ばたばたにげたりしても、すぐにつかまえられて、ぱりぱりほねごとたべられてしまうだろうと思ったので、しいておちついていました。

「おまえは、はとだろう。」

「さようでございます。」

「おれは、はとをたべるのが大すきだ。はとはやわらかくて味がいい。子ばとはせっかく旅にでて、世の中のきれいなことを見て勉強をしたのに、ここでたべられてしまうのかと思うと、自分の身の上が、かなしくてなりませんでした。」

すると、ふいに目の前に、おとうさんとおかあさんのなつかしい
わらい顔が、はつきりとうかび上りました。子ばとは、そのわらい
顔をじっと見ているうちに、あきらめの気持になり、どうせしかた
がない、たべられるなら、りっぱなさいごをとげたいと思って、
「どうぞめしあがってください」。

と、いいました。けれども、ひとりでになみだがあふれてきて、ど
うしても、とめることができませんでした。

それを見たわしは、

「おまえはないているな。たべられるのが、おそろしいんだな」
と、いいました。

「いいえ、おそろしくはありません。『どりの王様』ともいわれるあ

なたにたべられるのは、本望でございます」。

「なに、本望だど」。

「はい。わたしのようなつまらないものが、あなたのおなかのたし
になれば、ほんとにけっこうでございます」。

子ばとはそういうながら、谷川にさいていた、あの白いゆりのこと
を、思いました。

「では、なぜなくのか」。

「おとうさんとおかあさんのことを思ったからです。どうぞおとう
さんとおかあさんが、このさき元気でおくらしになるように、お
いのりをさせてください。それからたべていただくのなら、なん
の心残りもありません」。

子ばとはその時、あのきつつきのことを思いました。

「うん、そうか。それでは、ほかに、なにかいいたいことがあるか。と、わしはたずねました。」

「これといってべつにありません。ただ、『どりの王様』ともいわれる方が、つみのないものをたべるようなことは、これからはなさらないようにしてほしいと思います。」

子ばとはその時、勇ましくただしかった、あの男の子のことを思いました。

「よし。それじゃ、おとうさんとおかあさんのためにおいのりをするがいい。おいのりをすませたらたべてやるぞ。」

わしはそういって、かちかちとくちばしをならしたり、そのする

どいつめを、えだにこすりつけたりしました。

おいのりをすませた子ばとは、あのかわいいぼっちゃんを思い出しました。そうして、大きな声でいいました。

「では、わしさん、さようなら。よくわたしのいったことを、承知してくださいましたね。ありがとうございます。さあ、これでいい。どうぞたべてください。」

子ばとは、今はもうすっかりあきらめていたので、気持はほんどに明かるくなっていました。ですから、そのことばには、かなしみもおおそれありませんでした。

さすがのわしも、この子ばどには感心してしまいました。

「なんとというきれいな心を持ったとりだろう。こんなとりははじめ

て見た。

わしはもう、子ばとをたべようとは思いませんでした。このまま帰すつもりでした。ところがその時、急にからだから力がぬけて、ぐったりとなりました。そのひょうしに足はえだからはなれ、くららつと目まいがしたかと思うと、そのまま深い谷の中へ落ちていきました。

「やあ、たいへんだ。」

子ばとはすぐに追いかけていきました。谷底まで落ちたわしは、岩かどにからだをぶっつけて、たいそういたがっていました。子ばとは谷川から、水をふくんで来てのませました。それから、自分のからだで、わしのからだをこすりました。

わしはいよいよ、子ばどのきれいな心に感心してしまいました。

「おまえは、なんというきれいな心を持ったとりだろう。あたたかい親切がどんなにありがたいものか、おれはいま知った。ほんとにありがとう。さあ、どうか早く帰って、おとうさんとおかあさんを安心させておくれ。おれはだんだん元気になるだろう。おれのことばは、もう、心配しなくてもいいよ。」

わしのことばは、さつきとすっかりちがっていました。わしの気持は、前とはまったくかわってしまったからです。



子ばとは、わしがたいへんいい心になってくれたので、
「それではお大事に。また、いつかお目にかかりましょう。」
と、うれしそうに帰っていきました。

「ふしぎなことがあるものだ。」

子ばとは森の方へ向かって飛びながらも、わしのこといろいろ
思いだされてなりませんでした。

「あのわしがあんなにいい心になるなんて、ほんとにふしぎだ。わ
たしをたべようとした時、きつと急に病気になったんだ。でも、
助かってよかった。」

子ばとはそんなふうに思いました。

日が西の山にはいるころ、子ばとはなつかしい森へ帰って来まし
た。おとうさんとおかあさんの顔を見た時、ほんとうにうれしくて
なみだがでてきました。わずか五日の旅でしたが、長い長い旅のよ
うな気がしました。

「ああ、よく帰って来てくれた。」

「ずいぶんたいへんだったろうね。」

おとうさんばととおかあさんばとは、子ばとをだきしめて、なん
どもなんどもほおずりをしました。

その夜、子ばとは、自分の見て来たことを話しました。いろいろお
話をして一ばんおしまい、わしが急に病気になったことをいうと、
おとうさんばとは、

「はっはっはっ。急に病気になったって。それはね、おまえの心がきれいだっただからだよ。きれいな心が、あのおそろしいわしにさえ勝ったんだよ。」
と、うれしそうにわらいました。おかあさんばとは、
「よかったね。よかったね。」
といいながら、しっかりと子ばとをだきしめました。



お仕事の手びき

(一) 学級新聞

1 「新聞を作ろう」から「ひひょう会」までを、よく読みましょう。

○ まさおくんの学級では、三年生のとき、新聞のかわりに、どんなことをしていましたか。

○ 四年になって、学級新聞を作ろうというのは、どんなことから考えついたのですか。

2 新聞を作ろうということにきまって、

「話し合い」のとき、もんだいとなったことがらを、ノートに書きあげてごらん。

3 みなさんの学級では、新聞を作っていますか。もし新聞を作っているならば、

○ 何日ごとにだしていますか。

○ 何人ぐらいで編集していますか。

○ 新聞の記事には、どんなことがらがのせられていますか。

○ 教科書のように、書いてごらん。

4 新聞を学級で作るとして、

○ 月に一どがいいですか。

○ 十日に一どがいいですか。

○ 毎週一どがいいますか。

そのよいところと、つごうのわるいところを書きならべてごらん。

5 まさおくんの学級新聞にのせてある記事に○をつけなさい。

詩、わらい話、作文、運動記事、童話、まんが、しいく日記、など、考えもの。

6 詩がよっつてています。その中で、あなたの一ばんすきなものには、だいまくの上に○をつけなさい。

作者が子供らしく思われるのは、だいまくの下に△をつけなさい。

あたたかい日

川は流れている

ハンモック

雨あがり

7 作文がみっつてしています。一ばんすきなものには、だいまくの上に○をつけなさい。文をよんで、一年で、いつごろであるか、きせつのわかるものには、だいまくの下にそのきせつを書きいれなさい。

めだか

はいかぐら

一合 二本

8 しいく日記を読んで、上の月日のころ

はどんなようすか、下のことばにせんをひきなさい。

六月六日

たまご

六月十二日

青 虫

五月二十四日

さなぎ

五月十日

ちょう

(二) いろいろな国の話

1 「かしこい旅人」のところ、旅人は、つぎのことを見て、どんなことがわかったのですか。

ひかげを見て。

足あとを見て。

ありがむらがつているのを見て。

草をくいちぎったあとを見て。

麦がちらばっているのを見て。

2 「いたずらうさぎ」の話で、おもしろいところはどこですか。

3 このお話をげきになおして、かくげい

会などでやってごらん下さい。

4 「トム・サム物語」というのは、たいへん長いお話なのですが、その中からふたつだけ取りました。この話のどんなところがおもしろいと思いますか。

5 ここに集めたのは外国の名高い話ばかりです。このほかに、たくさんおもしろい話があります。いろいろ読んでみましょう。読んだら、そのあらすじをノートに書いておきましょう。

(三) 海の生活

1 「水泳」のところを読んで、つぎのことを考えてみましょう

(イ) まさおくんのいった「やれやれ、助かった」ということばに、一番よくむすびつくことばは、つぎの中のどれですか。
○ まさおくんは、それ(うき)にしっかりつかまった。

○ 「もうだめだ」まさおくんはふっと、こんなことを思った。

○ グッと力を入れると、からだですうっと、前に進む。

(ロ) 水泳をしたことを作文に書いてごらん。

2 「かつじくんの町」を読んで、つぎのことを研究しなさい。

(イ) かつじくんの町が、ふつうの町とちがっているのは、どんなところですか

(ロ) この文の前半の書き表わし方と、後半の書き表わし方は、少しちがっています。どんなところがちがいますか。

(ハ) りょうし町らしい感じのせているのはどこですか。

3 「水泳」の文と「かつじくんの町」の文

では、すっかり感じがちがっています。これはどうしてでしょうか。

○ 文のむすび方の上から

○ ことばの使い方の上から

○ その他のことから

いろいろ調べてごらん下さい。

4 めいめいの村や町のことを作文に書いてみましょう。どんなことをどんなふうにかいたら自分の村や町のことか、はっきりするか研究してください。

5 「ロビンソン・クルーソー」の話は、世界に有名なもので、イギリスの子どもで

これを読まないものはないと、いわれて
います。よく読んで、つぎのことを調べ
てみましょう。

(イ)この話で一番おもしろかったところを、
ノートに書き取ってみましょう。

(ロ)この話を読んで、自分の思ったこと、
感じたことを、話してごらんなさい。

(ハ)ロビンソン・クルーソーは、どんなせ
いしつの人だと思いますか。それが本
のどこでわかりますか。

(ニ)ロビンソン・クルーソーの話は、この
ほかにまだ、たくさんあります。たい

(四) きれいな空

1 「秋はどこに」のところをよく読んで、
つぎのことを、調べましょう。

○秋はどんなところにきていますか。秋
がきていると思うものに、○をつけな
さい。

人々のよそおい あさがお

入道雲 日の光

かみなりの音 ひまわり

夕すずみ 夜空

その中で、秋がきたことを一ばんよく
感じさせるものは、なんですか。

へんおもしろく、また、ためになる話
ですから全部読んでみましょう。

6 海の生活について、研究したり、調べ
たりして、作文に書きましょう。

7 新しくでたかん字が、たくさんありま
す。おしまいのかん字表を見て、書くれ
んしゅうをしましょう。かん字の書くじ
ゆんじょに気をつけましょう。

○「夜空にまたたく星は、かなしみにしず
む人にも、喜びにあふれる人にも、光
をあたえてくれているのです。」という
ことばを、よく考えてみましょう。

○毎日、暑い日がつづきます。でも、ど
こかに秋がきているようです。みなさ
んも、秋がきたことを作文に書いてみ
ましょう。

2 「星の世界」のところを読んで、つぎの
ことを調べましょう。

○人の目で見える星の数は、どのくらい
ですか。

○ウィルソン天文台の望遠鏡で見える数は、どのくらいですか。

○光年というのは、どんなことですか。

○星があんなに小さく見えるのは、どうしてですか。

○うちゅうには、どんなものがありますか。また、それはどんなになっていきますか。

3 「こまと星」のところを読んで、つぎのことを調べましょう。

○「こまと星」という、だいになっていきますが、こまと星は、どんなかんけい

からですか。

(ロ)「わたし」が、今もおぼえていること。

(ハ)天体のことを知るにしたがって、「わたし」の心をひいたのは、どんなことですか。

○さいごの「天体にむらがつている、たくさんのものをまわしたり、動かしたりするためには、すばらしい力がなければならぬはずだ。そのすばらしい力を考えていると、わたしはいつでも心がすんできます。」というのは、ど

があるのでしょう。

○つぎのことがわかるようにしましょう。

△こまのお話で

(イ)ふしぎでならなかったこと。

(ロ)こまをまわして、一ばんすきであったこと。

(ハ)今もわすれることのできないほど、うれしかったこと。

(ニ)こまをまわして、たのしかったこと。

△星のお話で

(イ)あねたちが、天体のことに心がひかれるようになったのは、どんなこと

んなことを、いったものでしょうか。

このことばを、よく考えてみましょう。

(五) 森の子ばと

(1) たいへん長いお話です。なんべんも読んで、つぎのお話が、わかるようにしてください。

○森のはとのなかまには、どんなしきたりがありますか。

○りっぱなはとになるためには、子ばとは、どうしなければなりませんか。

○子ばとは五日の旅にて、世の中のどんなきれいなところを見てきましたか。

(イ) (ロ)

(ハ) (ニ)

○子ばとは、これからわしにたべられるという時に、どうしてつぎのようなことがいえたのでしょうか。

(イ) 『とりの王様』ともいわれるあなたにたべられるのは、本望でございます。

(ロ) 『とりの王様』ともいわれる方が、つみのないものをたべるとは、これからはなさらないようにしてほしいと思います。

(ハ) 「……………」どうぞおとうさんとおかあ

さんが、このさき元氣でおくらしになるように、おいのりをさせてください。

(ニ) 「……………」よくわたしのいったことを、承知していただきましたね。ありがとうございます。……………」

○わしが、子ばとをたべないでかえしたのは、どういうわけですか。

○このお話は、大きななつにわかれています。それぞれに、だいを付けてごらんください。

(2) つぎのことばをつかって、みじかい文を作りなさい。

△みるみるうちに

△こんもりと

(3) おうちの人やお友だちの前で、このお話ができるように、おけいこしましょう。また、こんなお話を、みなさんも作ってごらんください。

かさねられ(かさねる).....73
 かざん.....18
 かため.....37
 かたわ.....31
 かつじ.....63
 かねもち.....80
 かみなり.....88
 かもめ.....62
 かるい.....13
 かわしも.....14
 かんけい.....103
 かんさつ.....10
 かんづめ.....73
 かにん.....126
 きおく.....106
 きかん.....70
 きつつき.....118
 ギニー.....78
 きまり.....97

きょうだい.....110
 きょうみ.....109
 きょうれつ.....40
 きより.....94
 くいちぎって(くらちぎる).....40
 くぎって(くぎる).....6
 くぐり(くぐる).....88
 くじびき.....11
 くじら.....42
 くだき(くだく).....85
 くだびれた(くだびれる).....42
 くちなし.....13
 くちばし.....118
 ぐったり.....138
 くふう.....5
 けいさん.....95

ケーキ.....52
 けご.....24
 けっこう.....135
 けんぎゅう.....91
 こうかい.....75
 こうさん.....81
 こうねん.....94
 こくりこくり.....99
 こげつく.....53
 こころよく.....87
 ごせい.....65
 ごてん.....57
 ごぼう.....20
 ごぼれた(ごぼれる).....41
 こまかい.....6
 さいご.....134
 さいなん.....78
 さかなで.....14

さかり.....23
 ささえる.....27
 さしえ.....8
 さしわたし.....98
 さすが.....47
 さつき.....139
 さつそう.....24
 さつそく.....5
 さなき.....27
 さばく.....36
 さぶとん.....13
 さも.....118
 さらわれ(さらわれる).....56
 サレー.....81
 さんせい.....5
 サントス.....87
 し.....10
 しいく.....10
 しいて.....133



新しくてたことば

アーサー.....50
 あいきょう.....57
 あげがた.....113
 あせる.....89
 あたりまえ.....39
 あっはっは.....49
 あね.....103
 あぶら.....69
 あぶらな.....23
 あまのがわ.....90
 あらあらしい.....131
 アラビヤ.....36
 あわてもの.....22
 いかげや.....54
 いかり.....76
 いきなり.....98

イギリス.....50
 いけん.....4
 いさましい.....136
 いちば.....73
 いったい.....38
 いぬがらし.....23
 いのちからがら.....55
 いのり(おいのり).....135
 いみ.....52
 いもうと.....19
 いわし.....72
 いんさつ.....7
 ウイルソンてんもんだい.....93
 ウオーツ.....86
 うちゅう.....97
 うつむいて.....19

うでまえ.....82
 うねうね.....64
 うんとこしょ.....47
 えらばれ(えらぶ).....4
 えんりよ.....32
 おい.....125
 おか.....42
 おかみさん.....51
 おこたり(おこたる).....116
 おこなわれて.....6
 おじぎ.....67
 おしこまれ(おしこむ).....58
 おしはかる.....94
 おす.....30
 おそぎ.....89

おだやか.....15
 おちついて.....38
 おの.....84
 おび.....27
 おぶった.....66
 おぼれる.....62
 おまけに.....31
 おもて.....14
 おやゆび.....51
 おりひめ.....91
 かいすいよく.....58
 かいぞく.....80
 かえって.....104
 かかと.....58
 かがやかせ(かがやかす).....121
 かけら.....109

どせい……………106
 どなり(どなる)……………56
 とびこみだい……………59
 ドライアイス……………109
 とりわけ……………89
 どころどろ……………58
 なかば……………89
 なきじゃくり(なき
 じゃくる)……………123
 なつかしい……………131
 なみうちぎわ……………59
 なみだ……………123
 なんせい……………90
 なんなら……………51
 にぎりあって(たぎ
 りあう)……………42
 ニュース……………8
 にゅうどうぐも……………88

ねずみいろ……………28
 ばい……………81
 はいかぐら……………18
 はか……………117
 はきだす……………54
 はくちょう……………91
 はじけ(る)……………88
 はしら……………81
 はずかしい……………78
 はずみ……………98
 はずれた(はずれる)……………34
 バター……………52
 はだか……………66
 はだし……………58
 ばかり……………86
 はたはた……………127
 ばたばた……………60
 はちみつ……………37
 はっした(はっする)……………96

はっぴょう……………5
 はと……………112
 はにかんだ(はにかむ)……………14
 はねる……………42
 はま……………67
 はめて(はめる)……………106
 はやり(はやる)……………98
 はり……………14
 ハル……………74
 ハンカチ……………123
 ハンコ……………52
 ハンモック……………15
 ひかけ……………41
 ひけて(ひける)……………121
 ひちびち……………68
 ひづけ……………21
 ひっこ……………36
 ひよいと……………48
 ひよう……………7

ひょう……………95
 ひょうし……………138
 びよこん……………67
 ふくんで(ふくむ)……………138
 ふくらます……………13
 ふしあわせ……………75
 ふっと……………60
 ふなぞこ……………72
 ふみこたえて(ふみ
 こたえる)……………48
 ふるいたたせ(ふる
 いたつ)……………92
 ふんばって(ふんばる)……………47
 へいきん……………6
 へんしゅう……………7
 ほ……………81
 ほうえんきょう……………93

しお……………65
 しかえし……………124
 しかめて(しかめる)……………125
 しきたり……………112
 しきもの……………86
 しくしく……………122
 しけん……………112
 じっこう……………7
 しなもの……………80
 じびきあみ……………68
 しぼり(しぼる)……………55
 しゃくどう……………66
 しゆじん……………51
 ジューリー……………82
 しょうがく(しょう
 がっこう)……………98
 しょうち……………44
 じょうぶ……………43
 しょうにん……………86
 しりもち……………49

す……………20
 すいえい……………58
 すいふ……………78
 ずが……………109
 すぎて(すぎる)……………103
 すてて……………54
 すなお……………133
 すばらしい……………111
 せい……………8
 せいり……………8
 せんたい……………92
 せいよう……………111
 せいせい……………79
 せいこう……………89
 せいぎ……………58
 せいかつ……………111
 すばらしい……………133
 すてて……………54
 すなお……………133
 すばらしい……………111
 そわそわ……………181
 そのくせ……………52
 ぞうき……………99

たいこ……………44
 たいよう……………93
 たえず……………114
 たえんけい……………23
 たしかに……………38
 ただしい……………97
 たたよう……………17
 たなばた……………96
 たにん……………130
 たぶん……………20
 だまして(だます)……………84
 たも……………72
 たんい……………94
 ちえ……………32
 ちきゅう……………95
 ちくおんぎ……………14
 ちつじょ……………97
 チビ……………57

つごう……………6
 つくろって(つくろう)……………65
 つち……………84
 つつじ……………16
 つとめ……………116
 つば……………106
 つばさ……………127
 つぶやき……………117
 つみ……………136
 つや……………27
 てごころ……………101
 てつ……………98
 てつき……………111
 でんしん……………119
 てんたい……………105
 どうよう……………92
 とおのいて(とおのく)……………105
 どうぶつえん……………119
 とげたい(とげる)……………134

計	極	度	向	親	列	角	妹	相	新
(95)	(91)	(76)	(59)	(51)	(40)	(28)	(19)	(9)	(4)
算	洋	輕	進	主	散	身	台	談	聞
(95)	(92)	(76)	(60)	(51)	(41)	(30)	(20)	(9)	(4)
万	千	夫	馭	味	暑	後	父	第	合
(96)	(93)	(78)	(63)	(52)	(41)	(31)	(21)	(9)	(4)
勢	望	航	岸	粉	晴	景	名	詩	発
(98)	(93)	(79)	(64)	(52)	(42)	(34)	(23)	(10)	(5)
画	鏡	倍	側	命	様	国	部	品	曜
(109)	(93)	(80)	(65)	(55)	(42)	(36)	(24)	(12)	(6)
役	億	柱	船	受	田	旅	方	綿	均
(117)	(93)	(81)	(66)	(56)	(44)	(36)	(24)	(13)	(6)
電	陽	客	引	飛	承	商	点	黄	印
(119)	(93)	(83)	(68)	(56)	(44)	(36)	(25)	(13)	(7)
信	单	決	油	魚	囚	連	皮	来	刷
(119)	(94)	(83)	(69)	(56)	(44)	(36)	(26)	(14)	(7)
園	位	無	旗	料	重	前	注	投	費
(119)	(94)	(87)	(72)	(57)	(45)	(33)	(26)	(15)	(7)
勇	秒	雲	港	理	打	指	起	追	編
(126)	(95)	(88)	(74)	(57)	(46)	(33)	(27)	(17)	(7)
他	球	北	母	活	語	深	太	岩	全
(130)	(95)	(90)	(74)	(58)	(50)	(39)	(27)	(17)	(8)
半	登	今	浴	者	行	時	安	体	
(95)	(91)	(76)	(58)	(50)	(40)	(28)	(19)	(8)	

かん字

まほうつかい	まぶしい	まったく	まっさかさま	まつ	またたく	ますます	ます	まかせて(まかせる)	まえかけ	マーリン	ほんもう	ほとんど	ほっきょくせい	ほくとう	ほおずり	ほうつと	ほうきぼし	ほうかく
50	65	139	47	64	90	40	3	114	56	50	135	26	91	90	141	96	103	91
やかん	もんしろちょう	もんだい	ものがたり	もぐもぐ	めす	むれ	むらがつて(むらがる)	むちゆう	むくむく	ムーア	みようみまね	みね	みずざわ	みぎ	まんが			
18	23	4	50	55	30	17	41	60	88	80	99	62	48	113	32			
ローピンソン・クルー	りょうりにん	りょう	らくらく	よそおい	よいしょ	ゆわえ(つける)	ゆがんで(ゆがむ)	ゆうぎ	やれやれ	ヤルマス	やつ	やし	やく					
74	57	69	101	88	62	44	31	126	61	78	47	38	28					
											わし	わけたら(わけり)	ロンドン					
											132	10	74					

Copyright 1949, by
The Gakkō Tosho Kenkyukai

All rights reserved
The text of this publication or any part thereof
may not be reproduced in any manner whatsoever
without permission in writing from the authors

小国407

国語四年生 上

Approved by Ministry of Education
(Date Oct. 22, 1949)

国語四年生上の編修について

一、本書は、教育基本法、学校教育法、学習指導要領一般編、国語科編、小学校国語科検定規準などの趣旨を具体的にあらわすことにつとめた。児童の興味や、生活経験や心理的発達に即して、單元学習をはかっているのもこのためである。

二、四年生用は上・下二冊とし、上は四月から十月まで、下は十一月から三月までに学習するよう構成されている。

三、本書は五單元からなっている。「学級新聞」では、児童の自治的国語活動を多面的に展開することをはかり、「いろいろな国の話」では、世界の国々の興味ある物語にふれさせ、「海の生活」では生活経験をもとにして、その拡充を興味の中になし、「きれいな空」では、天体へのあこがれと科学の世界を通して高い心情を養い、「森の子ばと」では、長編読解の力をのばすとともに、精神の力を得ることをめあてとしている。これらの五單元は、生活單元と要素單元を

調和的におりませ、国語の学習活動が深く多面的に展開されるよう特別の注意を拂って構成されている。

四、本書の新出語いは総数三二九語である。文章は、児童の生活言語の中、基本的なことばを用いた敬体をもとし、常体口語の使用にもなれ得るよう工夫されている。

五、かなは、平がなを本体とし、擬声語、擬態語、外国語などを写す場合にのみ、かなを用いている。

六、漢字の新出は一一〇字である。本学年がかなり多くの漢字を出しているのは用意あつてのことである。

六、巻末に「語い表」と「お仕事の手びき」をのせ、学習と指導の便をはかっている。「お仕事の手びき」は学習活動のひとつの例を示したのであつて、これから、いろいろな活動を多角的に展開されることを期待しているのである。

感謝のこころ

「川は流れている……」……奥田 準一氏作
「自分で育てたもんしろちょう……」……植村 利夫氏作
「かしい旅人……」……伴 康哉氏作
「いたずららさぎ……」……楠山 正雄氏作
「トム・サム物語……」……楠山 正雄氏作
「ロビンソン・クルーソー……」……永田 義直氏訳
「星の世界……」……国語第四学年中
「こまと星……」……石森 延男氏作
「森の子ばと……」……水谷まさる氏作

右の作品を本書に掲載させていただきましたこと
について著作者の方に厚く感謝申し上げます。

編者

廣島市東千田町
廣島高等師範学校附属小学校内
財団法人 廣島高等師範学校
校長 廣島高等師範学校教授
兼附属小学校主事 森岡 文策
執筆担当者 廣島高等師範学校教諭
森岡 文策
表紙と
さしえ
高田原小大今
橋原田川西石
正輝直利久光
人夫茂雄一美

昭和二十四年七月五日 昭和二十四年七月九日 昭和二十四年十月二十二日 昭和二十四年十月二十六日	再版 再版 再版 再版	印刷 印刷 印刷 印刷	昭和二十四年七月五日 昭和二十四年七月九日 昭和二十四年十月二十二日 昭和二十四年十月二十六日	昭和二十四年七月五日 昭和二十四年七月九日 昭和二十四年十月二十二日 昭和二十四年十月二十六日	昭和二十四年七月五日 昭和二十四年七月九日 昭和二十四年十月二十二日 昭和二十四年十月二十六日
昭和二十四年七月五日 昭和二十四年七月九日 昭和二十四年十月二十二日 昭和二十四年十月二十六日	昭和二十四年七月五日 昭和二十四年七月九日 昭和二十四年十月二十二日 昭和二十四年十月二十六日	昭和二十四年七月五日 昭和二十四年七月九日 昭和二十四年十月二十二日 昭和二十四年十月二十六日	昭和二十四年七月五日 昭和二十四年七月九日 昭和二十四年十月二十二日 昭和二十四年十月二十六日	昭和二十四年七月五日 昭和二十四年七月九日 昭和二十四年十月二十二日 昭和二十四年十月二十六日	昭和二十四年七月五日 昭和二十四年七月九日 昭和二十四年十月二十二日 昭和二十四年十月二十六日

定価 円 銭

著作者 廣島市東千田町廣島高等師範学校内
財団法人 廣島高等師範学校
会長 森岡 文策

発行者 東京都港区芝三田豊岡町八番地
学校図書株式会社
代表者 川口芳太郎

印刷者 東京都港区芝三田豊岡町八番地
図書印刷株式会社
代表者 川口芳太郎

発行所 東京都港区芝三田豊岡町八番地
学校図書株式会社

広島大学図書

01 0130449663

